URP 先端的都市研究シリーズ 34

上方・大阪都市文化の研究拠点形成

大学アーカイブの整備と発信

西田 正宏・奥野 久美子　編

先端的都市研究ブックレットシリーズの刊行に寄せて

本シリーズは、大阪市立大学都市研究プラザが、2014 年 4 月に文部科学省の共同利用・共同研究拠点の 1 つに採択され、「先端的都市研究拠点」として活動を開始したことを契機として、その「先端的都市研究拠点」としての共同研究の成果や、それを踏まえた教育実践の成果を、多くの人々に共有していただくことを目的として、2015 年 3 月に刊行を開始したものである。

都市研究プラザは、大阪市立大学が創設以来蓄積してきた都市研究の実績を踏まえて、2006 年 4 月に創設された。そして、その翌年の 2007 年に、文部科学省グローバル COE 拠点の 1 つに選ばれ、「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」というテーマを掲げて、国際的な研究拠点の形成を目指した活動に取り組むことになった。

その成果を受け継いで、2014 年には、文部科学省によって共同利用・共同研究拠点の 1 つに認定され、「先端的都市研究拠点」としての活動を開始することになった。共同利用・共同研究拠点としての認定は、6 年間を 1 期とするものであるが、第 1 期の最終年度である 2019 年度末に認定が更新され、2020 年度から第 2 期の活動を開始し、現在に至っている。

この「先端的都市研究拠点」としての活動の一つに、「公募型共同研究」がある。学外の研究者に、都市研究プラザの専任教員や兼任教員を含む共同研究グループを組織して、共同研究の提案をしてもらい、審査のうえ採択された共同研究には、研究資金の一部を助成するというものである。毎年度複数の研究課題が助成対象に採択され、それぞれが興味深い研究成果を産み出している。

そうした「公募型共同研究」の成果を、研究者のみならず、都市の現場で社会問題の解決に実践的に取り組んでいる人々にも、わかりやすいかたちで伝えることができないかと考えたことが、本シリーズの刊行を決めた、最も大きな理由である。そして実際、本シリーズを構成するブックレットの多くが、採択された「公募型共同研究」の成果を、平易な文章で伝える内容となっている。

また、社会生活のあらゆる側面においてデジタル化が急速に進展する今日の状況を踏まえるならば、多くの人に読んでもらいたいブックレットは、誰もが

アクセス可能なように、ウェブサイトに電子書籍の形式で公開することが望ましいという判断から、近年に刊行されたものは、刊行後ただちに、都市研究プラザのウェブサイトでPDFファイルの形式で公開している。それに加えて、過去に刊行されたものについても、そこに収録されている文章の多くが、大阪市立大学の機関リポジトリから入手可能となっている。

都市問題に関心を寄せる研究者や都市の現場で活動する方々の多くが、本シリーズを構成するブックレットをお読みになり、そこから何らかの示唆を得て、それを自らの研究や実践に活かしていただくことを、強く願っている。

大阪市立大学都市研究プラザ所長
阿部 昌樹

目次

序章　上方・大阪都市文化の研究拠点形成：大学アーカイブの整備と発信
研究代表者　西田 正宏　1

第1章　大阪公立大学蔵古典籍の資料性
西田 正宏　5

第2章　〈吉沢コレクション〉受入れと整備の報告
佐藤 敦子・佐賀 朝・奥野 久美子・橋本 唯子　23

第3章　吉沢英明氏の人と仕事
高橋 圭一　49

第4章　旭堂南海師に訊く（zoom 座談会）
旭堂 南海　67

第5章　大阪市立大学恒藤恭旧蔵資料と
明治期島根県明星派歌人とのかかわりについて
奥野 久美子　81

序章

上方・大阪都市文化の研究拠点形成：

大学アーカイブの整備と発信

研究成果報告論集

研究代表者　西田 正宏

１　本研究の目的と意義

本研究は、2022 年度に統合する大阪市立大学と大阪府立大学がそれぞれ所蔵する、また今年度収蔵予定の、上方・大阪文化にかかわる貴重なコレクションについて、大学統合に先駆けて整備に着手し、研究利用・地域開放のための整備公開や、デジタル整備を進めながら、共同利用、共同研究を同時に進めていくことを目的とした共同研究である。

大学統合の３年後に、文学研究科は、大阪城という文化的・歴史的表象に臨む森之宮に開かれる新キャンパスに移る。大阪城は上方文化においては、人気の高い〈太閤記もの〉の舞台でありシンボルでもある。つまり、文楽・歌舞伎・落語・講談等の演劇・大衆演芸に代表される上方文化の研究と、そのための大規模な環境整備は、キャンパス移転が持つ都市文化的意義を最大限に増幅できる一大事業と言える。

市大・府大には、それぞれに長年にわたり蓄積してきた上方・大阪文化に関する研究実績があり、貴重な資料もそれぞれ多く所蔵している。さらに 2021 年度、市大文学研究科では、数万点におよぶ講談・演芸関係資料コレクション（吉沢コレクション）の寄贈を受ける話があったため、本研究チームで 2021 年春から受け入れ準備を進め、2021 年 8 月には市大および一部資料は府大への移送が完了した。

市大・府大と統合後の大学は、上方・大阪の都市文化形成の一大研究拠点と

なりうるポテンシャルを持つ。その力を最大限生かしながら、紙資料とデジタル双方の環境整備と研究を進めることは、学界全体にも大きな意義を持つ。

２　研究チームについて

上記の目的にむけ効果的に整備と研究を進めるため、以下のようにチームを編成した。

西田正宏　大阪府立大学【代表】
高橋圭一　大阪大谷大学
橋本唯子　和歌山大学
山村桃子　島根県立大学
武田悠希　立命館大学（非常勤講師）
Stephen　FILLER（スティーブン・フィラー）オークランド大学（アメリカ・ミシガン州）
水内俊雄　大阪市立大学
桐山孝信　大阪市立大学
久堀裕朗　大阪市立大学
奥野久美子　大阪市立大学

上記のメンバーで、チームを以下の通り研究内容別に大きく三つに分け、資料の整備と研究を進めた。

①都市文化としての上方演芸（講談）の研究
②法哲学者恒藤恭の思想形成と、都市環境がそれに及ぼした影響の解明
③上方・大阪文化資料アーカイブの整備とデジタル化

３　本論集の構成：これまでの成果と今後の見通しにふれつつ

上記①の上方演芸については、2022 年 2 月 20 日（日）に、大阪在住の講談師、旭堂南海師を招き、本研究を紹介する zoom での報告会を開催し、研究成果報告と吉沢コレクション受贈報告を兼ねた。この報告会では、最初に代表者

の西田正宏が市大・府大の貴重資料と、両大学統合後の資料活用の展望について概説し、続いて共同研究者の奥野久美子が講談本を中心とした吉沢コレクションの受入れ状況や、講談本の近代文学研究への活用について説明、続いて共同研究者の高橋圭一が、吉沢コレクションと寄贈者の吉沢英明氏の功績について語った。その後、旭堂南海師に、講談本を用いた講談創作の実情など、講談師ならではのお話をうかがう座談会を設けたあと、講談を実演していただいた。

学内や関係者に限った小規模なものとして予定したが、当日は参加者 60 名を超える盛況で、本研究、ことに吉沢コレクションへの学界の関心の高さがうかがわれた。また、南海師をはじめとする現役の講談師が、講談の創作に活用するために吉沢コレクションの整備公開を待ち望んでいることもわかり、コレクションが今後、学界のみならず演芸界でも活用されることが期待された。

本論集は、この報告会の内容を中心とし、第一章から第四章までは、当日のプログラムのまま構成した。ただし、第二章の吉沢コレクション受入れ報告については、報告会では奥野久美子による30分足らずの簡潔な報告であったが、本論集に収載するにあたり、コレクション受入れメンバーとの共同執筆とし、より詳しく大幅に加筆した。2 月 20 日の報告会のプログラムや当日の様子についても、この第二章で佐藤敦子が詳しく報告している。また、報告会では最後のメインイベントであった、旭堂南海師による口演は、本論集では割愛している。

上記②の恒藤恭関連資料に関しては、恒藤恭の少年時代の短歌活動について、関連する貴重な資料が、故郷である島根県の島根県立大学に多数所蔵されている。そのため同大の山村桃子を共同研究者に招き、奥野久美子（市大）とともに双方の資料のデジタル化とデータ化を進めた。2022 年 2 月現在、県大の貴重資料「銀鈴」（恒藤恭も少年時代に講読・投稿した地元の文芸同人誌。明治 30 年代発行）全号が同大松江キャンパス図書館 HP にて公開中である。

研究成果として、奥野はこれら資料と市大恒藤記念室の資料をもとに、2021 年 12 月 1 日、大阪府立大学で「大阪市立大学恒藤恭旧蔵資料の紹介―芥川龍之介との交友、島根県明星派歌人とのかかわりなど―」と題して講演を行った。本論集にはその内容に加筆したものを、第五章に収載している。

上記③の上方資料のデジタル化に関しては、2022 年 3 月中にも、演芸関係資料を中心に、文学研究科特設 HP にて、一部画像を公開予定である。

大量の資料の整備は端緒についたばかりである。整備を完了し、学界や演芸界にも寄与できるようになるまでには、今後も長期的に基礎整備を継続しつつ、一定の研究成果を出し、講談師をはじめとする演者とも協力しつつ、学界のみならず地域へも大阪公立大学所蔵資料の魅力と価値を発信していく必要がある。

第１章

大阪公立大学蔵古典籍の資料性

西田 正宏

本稿は、オンラインイベント「上方・大阪都市文化の研究拠点形成―新収・吉沢コレクションを中心に―」で発表した原稿に若干の補訂を加えたものである。当日は初めてパワーポイントを使って発表した。発表の際のパワーポイントも資料としたので、合わせて参照していただきたい。また本発表は研究発表ではなく、基本的には大阪公立大学が所蔵する古典籍の紹介であり、本稿も論文とは言えないので、口語体のままとした。

１　はじめに

本日は、あまり耳慣れない題をつけましたが、大阪市立大学と大阪府立大学が統合して、新しく設立される「大阪公立大学」が特に古典籍について、どのような蔵書を有し、それが研究史的に見てどのような意義があるのかについてお話ししたいと存じます。「資料性」と名付けましたのは、恩師である伊藤正義先生がかつて使われたものを使わせていただきました。資料の性格とその価値というような意味をこのことばには込めています。

学会的にはすでに知られたことばかりで、目新しいことはあまりありませんが、まずは本日の研究発表の前座、全体の概論としてお話しさせていただこうと思います。

なお、「古典籍」と題を付けましたが、一部、近代の資料で重要なものについてもお話しさせていただくことになります。それでは、パワーポイントの発表資料をご覧ください（パワーポイントの画像は本章末尾に掲載）。冒頭に二つ〇を付けて掲げましたのは、まさに統合することによって物理的に倍になるわけで

すから、そのことと、府大、市大ともに「＊＊文庫」と呼ばれるものが多く集まっているということを、特徴して掲げておきました。

２　大阪府立大学（旧大阪女子大学）の古典籍

それではまず、現在、私の所属している大阪府立大学蔵の古典籍について取り上げます。このことも研究者のあいだでは知られたことかもしれませんが、大阪府立大学はそもそも工学・農学・経済学を中心とする実学の大学でありまして、いわゆる古典籍は皆無でした。いま大阪府立大学蔵書と申している古典籍はほとんど旧大阪女子大学所蔵のものです。それらについては、すでに整理されて、『和漢書目録』（一九七七（昭和五二）年）という目録が作られています。この目録が作られ、多くの研究者の知るところとなったと思われます。その蔵書の大部分は、「山田文庫」という蔵書印を持つものです。では山田文庫とは何かと申しますと、パワーポイントの資料にも説明しましたように、

山田文庫

大阪府女子専門学校（一九二四（大正十三）年設置）の創設資金提供者山田市郎兵衛氏ならびにその子孫の方がたからの、一九三四（昭和九）年から三次にわたる寄金によって購入された書籍を中心とする。後に一部、蔵書も寄贈。蔵書印は山田文庫。約二五〇〇点。江戸期の和本を中心とする。特別に珍しいものや特色のあるものを購入しようとしたというよりは、版本（江戸期に印刷された本）を中心に、幅広いジャンルが集められており、啓蒙的な書物（江戸期の古典注釈書）も多く、研究というよりは教育に中心を置く集書であったと思われる。とはいうものの、

・室町期書写の『自讃歌注』、『（伝兼好筆本）伊勢物語』

・飛鳥井雅章の歌集（歌数の最も多いもの）→古典文庫

・『物臭太郎絵巻』『道成寺絵巻』などの室町後期から江戸初期にかけての絵巻物

・『はちかづき』『ゑぼしおり』『岩屋草子』などの奈良絵本

・『源氏物語』の絵の描き方を指示した『源氏物語絵詞』

など、研究の面からも貴重なものを含む。江戸期の和本の中にも稀少なものがあるが、一点一点の書誌的調査は今後の課題である。

ということになります。大阪府立大学、旧大阪女子大学の古典籍は、この山田文庫が大部分を占めています。パワーポイントには、代表的なものとして、『物臭太郎絵巻』と『源氏物語絵詞』を資料として載せておきました。

『物臭太郎絵巻』については、一九七六（昭和五一）年、信多純一氏編著『古本物くさ太郎』に写真版と翻刻に加え詳細な諸本解題が付されて、提供されています。資料のもつ文学史的な意義も信多先生の御本に詳しく述べられています。ちなみに中学校の歴史の教科書などにもよく利用されています。

『源氏物語絵詞』についても、玉上琢弥氏に他の伝本のことなどを含め、詳細な研究が備わっています。「絵詞」ですが、ご覧のように源氏物語の絵が描かれているわけではなく、どのように絵画化するかを指示したものです。

『和漢書目録』には、それ以外にも、

瀧村記念文庫

大阪府女子専門学校初代校長滝村斐男の寄贈書（大正十四年）。その多くは父瀧村小太郎の蔵書であったとみられる。蔵書印は瀧村記念文庫。楽譜などの音楽資料の他、不如学斎叢書一六七冊（岡田景徽編、勝海舟序（自筆））、海舟伝稿二六冊（瀧村小太郎編）、『飛鳥井家秘抄』などを含む。和本のみが貴重書庫に収められる。

や、小澤記念文庫（小澤融覚）、平林文庫（平林治徳）、石山記念文庫（石山徹郎）などが収録されています。例えば、小澤記念文庫の和書は江戸時代の料理書がほとんどです。これら『和漢書目録』に収録されているもの以外に、「山崎文庫」があります。山﨑文庫については次に示した通りです。

山崎文庫

大阪女子大学教授であった山崎喜好氏（昭和三二年没、四九歳）の収集された俳書を中心に、関係書（山田文庫所収の俳書など）を増補して構成。約一二〇〇点。

蔵書印は山崎文庫。そもそもは俳書以外も存在したと思われ、それらは山崎文庫とは別置される。蔵書印によってその存在は確認できる。「漢和聯

句懐紙」（慶長十三（一六〇三）年～寛永十三（一六三六）年にかけての宮廷聯句の懐紙）、北村季吟自筆「延宝六年歳旦巻物」（一六七八）、『本朝文選』初版（一七〇六）、「名家消息」（俳人書簡を張り継ぎ、四巻としたもの）など稀覯書を含む。

また大きな特色は、山崎氏が調査の過程でペン筆写された多くの俳諧関係のペン写原稿類や影写したものが多く残されていることである。そのなかには現在散逸して失われたものも多い。

山崎文庫については、『山崎文庫目録』（一九七二（昭和四七）年）が作られています。パワーポイントの資料としては、山崎氏の手になるペン写本を挙げておきました。これらは、すでに原本の所蔵者がわからなくなってしまったものや焼失した資料もあり、この山崎氏によるペン写本の価値は今後もっと見直されるべきだと思います。またこのペン写本には、山崎氏による資料の貸し借りなどの書き入れも多くありまして、当時の俳文学研究者との交流をうかがわせる重要な資料です。

比較的最近、寄贈されたのが、大阪女子大学名誉教授で、近世演劇の研究者の土田衛先生の蔵書である「椿亭文庫」です。

椿亭文庫

二〇〇三（平成十五）年、大阪女子大学名誉教授土田衛氏より長年の収集にかかる歌舞伎・浄瑠璃など演劇関係書の寄贈を受けたもの。演劇関連の書籍以外に当時の時代状況を伺うための資料（暦）や当時の辞書なども含む。特に『あやね竹』は大森善清という上方の浮世絵師の一級資料であり、学会での評価も高い。

蔵書印は　椿亭文庫　椿亭蔵書　土田衛　土田文庫　など。

『椿亭文庫目録』（二〇〇五（平成十七）年、上方文化研究センター研究年報第六号別冊）および『椿亭文庫所蔵歌舞伎番付目録』（二〇〇九（平成二一）年、上方文化研究センター研究年報第十一号別冊）が刊行されている。

椿亭文庫は演劇関係の書籍が多いのですが、今回資料として挙げましたのは『あやね竹』という絵本です。中国古典を題材に描かれたものですが、この作

者は、上方の大森善清という浮世絵師で、当時の版本にも挿絵を描いています。現在大和文華館の館長をされている浮世絵の研究者・浅野秀剛氏による研究が具わっていますが、この大阪府立大学本、土田先生の御本は、初版の完本としては唯一のものであるようです。また大森善清の基準作としても価値の高いものです。

他にまとまったコレクションとしては、児山文庫があります。次にまとめましたように、大阪女子大教授であった児山信一氏の蔵書で、近代の歌集を中心とするものです。

児山文庫

大阪女子大学教授児山信一氏旧蔵の明治大正期の歌集を中心とするもので六五四冊から成る。児山氏には『新講和歌史』という著作があり、その執筆に関連して、収集された書籍かと推量される。児山は一九三一（昭和六）年に三十二歳の若さで死去。

さらに、比較的大阪府が財政的に裕福であった時代に、例えば、理系が大規模な実験機材を購入するための設備費が、措置されていたことがありまして、それが国文学科に廻ってきた折に購入したのが次の資料です。

上方古典芸能資料

『芝居番付・絵尽目録』（一九八一（昭和五六）年）

上方古典芸能資料収集の特別予算が認められ、昭和五五年三月に購入されたもの。歌舞伎の番付六八六枚と絵尽三九七点をとじ合わせた十九冊と浄瑠璃の番付一冊（五八枚）、そして明治初期の劇場座席売上表二三冊からなる。演劇の文化史的な環境を知るのに欠かせない資料。

『浄瑠璃本目録』（一九八九（平成元）年）

これも上記と同様の上方古典芸能資料収集の一環。一五〇点。近松や竹田出雲をはじめとする浄瑠璃正本のコレクション。

今回は、先に挙げた近世演劇のものではなく、同じ経費で購入した『謡絵本　松風』を挙げておきました。この資料についてもすでに小林健二氏による詳細な解題が具わります（伊藤正義先生編『磯馴帖』）。詞章は謡曲の松風をそのまま

写したものですが、描かれている絵に、当時の舞台の状況（特に作り物の様子）が反映されていると言われています。能を絵本化したものはあまりなく、そういう面からも貴重な資料です。

以上、ここまでは、大阪府立大学の蔵書を紹介して参りました。大阪女子大学からのものをそのまま継承しているわけです。

３　大阪市立大学蔵の古典籍

次に大阪市立大学の蔵書を見ていくことにします。まず国文学の研究者に最もよく知られているのが、「森文庫」だと思われます。次に森文庫と所蔵者であった森繁夫氏について簡単にまとめておきました。

森文庫

森繁夫氏の蒐集した書籍。上方を中心とする人物、和歌資料。おおむね大阪市立大学が所蔵するが、雑誌など一部は、関西大学などにも。

森繁夫

明治十五年岡山県生まれ、素封家森十郎男。号は、「小竹園（ささぞの）」。昭和二十五年西宮市甲陽園にて没。早稲田専門学校（現早稲田大学）卒。摂陽汽船・大阪商船等海運業の要職に就く。

短冊の蒐集は斯界の第一人者として、また、国学者歌人の筆蹟伝記の研究者として名高い。歌は佐々木信綱の門人として「心の花」に属した。

「先賢伝記資料」と名付けた人物伝のカード記入は、大正の末頃から始められたと思われる。昭和四年六千枚、同五年六千枚等欄外に印刷され、膨大かつ貴重なものであるが、後年中野荘次氏の目にとまり、「名家伝記資料集成」と題して出版された。

蒐集された書籍類は、一括して大阪市立大学に寄贈、「森文庫」としてしられ、その全容は「大阪市立大学図書館所蔵森文庫目録　上・下」としてまとめられている。

今回は、手元に適当な写真がありませんでしたので、以下は、図版はありませ

ん。現在、大阪府立大学で作成していた『蔵品選』から一部を抜き出し、それに主として森文庫の和歌資料を加えて、新大学の特徴的な資料を紹介する冊子を、開学に合わせて作成しています。先日、森文庫の撮影も終えました。

それはそれとしまして、大阪市立大学には、そのほかにも著名な文庫が多く知られています。広辞苑の編纂などで著名な元京都大学教授・新村出博士の蔵書の一部が入っています。「新村文庫」です。これは目録もあります。また市大の国文学専攻に関係するところで言えば、万葉集研究の第一人者で、大阪市立大学名誉教授・小島憲之博士 の全蔵書も収められています。

古典籍というわけではありませんが、大阪市立大学の奥野久美子准教授が研究を進められています、芥川龍之介と親交があった、大阪市立大学初代学長・恒藤恭の関連資料もあります。

他にも、福田文庫（元東京商科大学教授・福田徳三博士の全蔵書）、ゾンバルト文庫（ドイツの経済学者ヴェルナー・ゾンバルト博士の蔵書の一部。経済学、特に社会主義関係の文献多数）、内藤文庫（元京都大学教授・内藤湖南博士の蔵書の一部。中国古代史、史学、仏教に関する漢籍など）など、古典籍だけには限らない多くの蔵書が、現大阪市立大学には存在しています。

そして今回、ここに新たに、「吉沢コレクション＝吉沢英明氏所蔵の講談本を中心とする近代から現代にかけての大衆演劇資料」が加わったと言うことになります。明治・大正期の講談本が中心ですが、江戸時代の実録の写本も存在します。このあとにこの吉沢コレクションについて、奥野さんと大阪大谷大学教授・高橋圭一氏に発表していただくことになります。

４　大阪市立大学蔵の古典籍上方学芸（文学と芸能）

それでは最後にこれらの蔵書をどのように活用、活用というのはあまりよい言い方ではないのですが、敢えてそのように申しあげますが、私見を申し上げたいと存じます。ご承知のように大阪女子大学の資料も研究者の間では著名なものでした。大阪市立大学のものももちろんそうです。国文学の学会ではよく知られたものです。原典を所蔵していることがいかに研究するうえで、強みで

あり、重要なことであるのかということも主張してゆく必要があると思います。「知る人ぞ知る」資料ではなく、広く一般の人にもその価値を知ってもらうことも大切なことです。大阪女子大学と大阪府立大学が統合したときから、現在まで貴重書の公開講座を、細々とではありますが続けてきました。古典籍を所蔵することの意義について、少しは理解していただけるようになったのではないかと思っています。

そこで、今回、文学部が森之宮に移転するとき（二〇二五年予定）に、これらの資料のうち、特に大阪を中心とするものを集め、「大阪（上方）学芸資料」として、大阪府立中之島図書館の大阪誌料に匹敵するものとして打ち出すことができるのではないかと考えています。以下にその特徴について述べたいと思います。

①　文献と演者と

大阪公立大学の所蔵する上方学芸資料は、研究者は言うまでもなく、「現代の演者と密接に関係している」ということを特徴としてあげることができるでしょう。

先に挙げました土田先生の「椿亭文庫」および大阪女子大学時代にまとめて購入した「上方芸能資料」の浄瑠璃や歌舞伎の資料は、久堀教授（文学部）が研究対象としておられますし、文楽協会のさまざまな技芸員、例えば、桐竹勘十郎（三代目）さんを招いて「講座」を開催しています。

また観世流が中心ですが、版本の謡本や先にも挙げた「謡絵本」等の資料は、いまは能の研究者は大阪公立大学にはいませんが、喜多流を創設した北（後に「喜多」）七太夫は堺の出身（『堺鑑』による）で、秀吉に認められました。実は、私はいま、喜多流の能楽師の友枝雄人師に　謡と仕舞のお稽古をしていただいておりまして、公演のパンフレットに解説を書かせてもらったりしています。

そしてまさにここに吉沢コレクションという膨大な講談関係の資料が加わることになったわけです。ご承知のように奥野准教授（文学部）が研究を進められておりますし、まさにその御縁があって、このコレクションは大阪市立大

学に入ったわけです。そして、今回もご登壇いただきます旭堂南海師は大阪府立大学での公開講座などを中心に交流をさせていただいています。資料と研究者と演者がつながることになったわけです。

今さららしく申しあげるまでもなく、多くの蔵書は研究と一体になって、初めてその価値が確認されることになります。さらにそこに演者が加わることで、古典研究、文献研究だけにはとどまらず（古典の世界だけには閉じず）現代にも開かれた視点を持つことができると思われます。

なお、研究ということだけで言えば、上方学芸に関係するものとして「伏見屋文書」があります。歌舞伎役者と遊女の関係などを具体に示すものですが、こちらは佐賀教授（文学部）が研究対象とされる可能性がありますし、「森文庫」については、私が研究対象にし、実際に森文庫の資料を使って、論文も書かせてもらっています。

②　「学」としての芸能研究の伝統の継承

さらにこれらの研究が、「市大国文」の伝統である、文献に基礎を置く地に足のついた研究（文献基礎学）を継承するものであることも重要な意味を持っているでしょう。

浄瑠璃・歌舞伎については、大阪市立大学には、近松の研究者で、演劇を興業（文学的な環境）なども含めた総体として捉えることや、「文学史」という視点の重要性を説いた森修先生、さらにその研究を継承、発展させた阪口弘之先生がおられ、そして大阪女子大学には先程来申しあげてきました「椿亭文庫」の所蔵者であった土田衛氏がおられます。また能については、文学史的環境という視点から能や謡曲の詞章を考察された大阪市立大学の伊藤正義先生、そして同じ京都大学出身と言うことで、伊藤先生に私淑されていた堀口康生氏（大阪女子大）がいます。このような芸能研究の伝統に、先ほどから何度も申しあげていますように「講談」の研究が加わることになったのです。

新大学では「総合知」ということが喧伝されています。しかし「総合知」なるものがそうそう簡単に身につくものではないことは今さら申しあげるまでもないことです。それを真に下支えする（文献）基礎学（＝古典知とよんでも

よいかもしれません）の重要性を再認識させるためにも、これらの蔵書を、改めて学内、学外に知らせる必要があると考えています。

一方で、この吉沢コレクションの全貌を明らかにするためには、講談本の内容を分析する国文学（古典および近代文学）は言うまでもなく、歴史学、思想、美術、大衆芸能などの研究、またコレクション自体の整理には、図書館学や出版情報学などありとあらゆる人文系学問の専門知を結集させて取り組むことが必要です。そういう意味ではこの吉沢コレクションは、人文系学問の「総合知」を実践する題材であるとも言えます。

最後に原典（原本）を所蔵することの強み、意義を象徴的に証明するものとして、現大阪府立大学所蔵の漱石の自筆原稿を挙げておきました。

活字本からでは得ることのできないさまざまな情報が、この原稿からは読み取れます。漱石がふつうに草仮名を使っていることも、あたり前のこととはいえ、真っ先に気づくところです。授業でもこの原稿をプリントにして配布したりしていますが、まずそのことに学生たちは、驚くようです。今までにない視点から、考え始めるようです。

以上、最後は蛇足の蛇足みたいなことになりましたが、これで大阪公立大学が所蔵する資料についての概論的な話を終わらせていただきます。

大阪公立大学蔵古典籍の資料性

西田正宏

○両大学が統合することにより西日本において、質・量ともに古典籍を蔵する有数の大学となる。

○さまざまな特色ある「文庫」が集まる。

一、大阪府立大学蔵の古典籍

旧大阪女子大学所蔵のものが中心

→『和漢書目録』・『蔵品選』

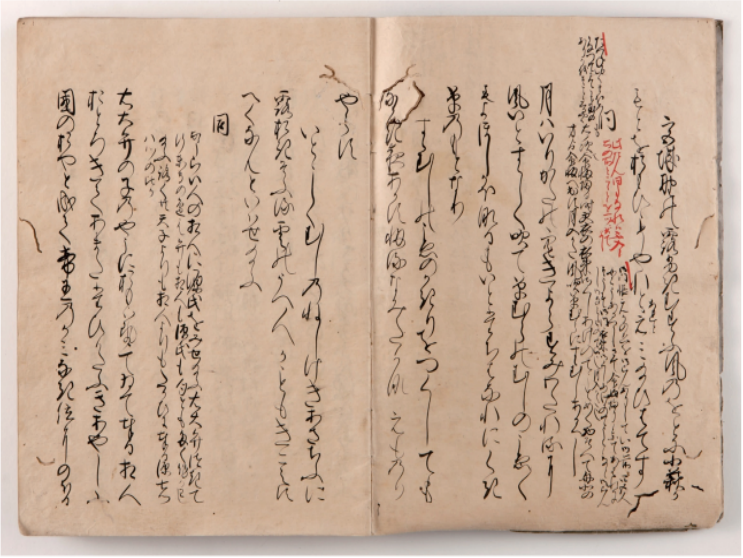
山田文庫

大阪府女子専門学校（一九二四（大正十三）年設置の創設資金提供者山田市郎兵衛氏ならびにその子孫の方がたからの、一九三四（昭和九）年から三次にわたる寄金によって購入された書籍を中心とする。後に一部、蔵書も寄贈。蔵書印は山田文庫。約二五〇〇点。江戸期の和本を中心とする。特別に珍しいものや特色のあるものを購入しようとしたというよりは、版本（江戸期に印刷された本）を中心に、幅広いジャンルが集められており、啓蒙的な書物（江戸期の古典注釈書）も多く、研究というよりは教育に中心を置く集書であったと思われる。とはいうものの、

・室町期書写の『自讃歌注』『(伝兼好筆本)伊勢物語』
・飛鳥井雅章の歌集(歌数の最も多いもの)→古典文庫
・『物草太郎絵巻』『道成寺絵巻』などの室町後期から江戸初期にかけての絵巻物
・『はちかづき』『ゑぼしおり』『岩屋草紙』などの奈良絵本
・『源氏物語』の絵の描き方を指示した『源氏物語絵師』

など、研究面からも貴重なものを含む。江戸期の和本の中にも稀少なものがあるが、一点一点の書誌的調査は今後の課題である。

『物臭太郎絵巻』



『源氏物語絵詞』

瀧村記念文庫

大阪府女子専門学校初代校長滝村斐男の寄贈書（大正十四年）。その多くは父瀧村小太郎の蔵書であったとみられる。蔵書印は瀧村記念文庫。楽譜などの音楽資料の他、不如学斎叢書一六七冊（岡田景徽編、勝海舟序（自筆））、海舟伝稿二六冊（瀧村小太郎編）、『飛鳥井家秘抄』などを含む。和本のみが貴重書庫に収められる。

瀧村文庫音楽関係資料

他に、小澤記念文庫（小澤融覚）、平林文庫（平林治徳）石山記念文庫（石山徹郎）などが、『和漢書目録』に収録されている。

山崎文庫

大阪女子大学教授であった山崎喜好氏（昭和三二年没、四九歳）の収集された俳書を中心に、関係書（山田文庫所収の俳書など）を増補して構成。

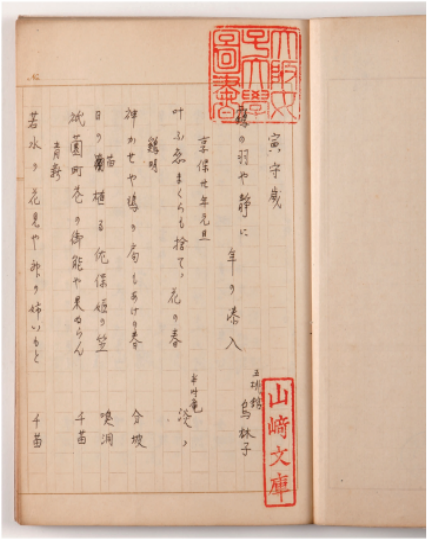
約一二〇〇点。

蔵書印は山崎文庫。そもそもは俳書以外も存在したと思われ、それらは山崎文庫とは別置される。

蔵書印によってその存在を確認できる。「漢和聯句懐紙」（慶長十三（一六〇三）年～寛永十三（一六三六）年にかけての宮廷聯句の懐紙）、北村季吟自筆「延宝六年歳旦巻物」（一六七八）、『本朝文選』初版（一七〇六）、「名家消息」（俳人書簡を張り継ぎ、四巻としたもの）など稀覯書を含む。

また大きな特色は、山崎氏が調査の過程でペン筆写された多くの俳諧関係のペン写原稿類や影写したものが多く残されていることである。そのなかには現在散逸して失われたものも多い。

→『山崎文庫目録』（昭和四七年・一九七二）



山崎文庫ペン写本

椿亭文庫

二〇〇三（平成十五年）、大阪女子大学名誉教授土田衛氏より長年の収集にかかる歌舞伎・浄瑠璃など演劇関係書の寄贈を受けたもの。演劇関連の書籍以外に当時の時代状況を伺うための資料や当時の辞書なども含む。

特に『あやね竹』は大森善清という上方の浮世絵師の一級資料であり、学会での評価も高い。

蔵書印は　椿亭文庫　椿亭蔵書　土田衛　土田文庫など。

『椿亭文庫目録』（平成十七年三月、上方文化研究センター研究年報第六号別冊）および『椿亭文庫所蔵歌舞伎番付目録』（平成二十一年十二月、上方文化研究センター研究年報第十一号別冊）が刊行されている。

あやね竹

児山文庫

大阪女子大学教授児山信一氏旧蔵の明治大正期の歌集を中心とするもので六五四冊から成る。児山氏には『新講和歌史』という著作があり、その執筆に関連して、収集された書籍かと推量される。児山は一九三一（昭和六）年に三十二歳の若さで死去。

◎上方古典芸能資料

『芝居番付・絵尽目録』（一九八一年）

上方古典芸能資料収集の特別予算が認められ、昭和五五年三月に購入されたもの。歌舞伎の番付六八六枚と絵尽三九七点をとじ合わせた十九冊と浄瑠璃の番付一冊（五八枚）、そして明治初期の劇場座席売上表二三冊からなる。演劇の文化史的な環境を知るのに欠かせない資料。

『浄瑠璃本目録』（一九八九年）

これも上記と同様の上方古典芸能資料収集の一環。一五〇点。近松や竹田出雲をはじめとする浄瑠璃正本のコレクション。

『謡絵本　松風』

二、大阪市立大学蔵の古典籍

森文庫

森繁夫氏の蒐集した書籍。上方を中心とする人物、和歌資料。おおむね大阪市立大学が所蔵するが、雑誌など一部は、関西大学などにも。

森繁夫

明治十五年岡山県生まれ、素封家森十郎男。号は、「小竹園（ささぞの）」。昭和二十五年西宮市甲陽園にて没。早稲田専門学校（現早稲田大学）卒。摂陽汽船・大阪商船等海運業の要職に就く。

短冊の蒐集は斯界の第一人者として、また、国学者歌人の筆蹟伝記の研究者として名高い。歌は佐々木信綱の門人として「心の花」に属した。

「先賢伝記資料」と名付けた人物伝のカード記入は、大正の末頃から始められたと思われる。昭和四年六千枚、同五年六千枚等欄外に印刷され、膨大かつ貴重なものであるが、後年中野荘次氏の目にとまり、「名家伝記資料集成」と題して出版された。

蒐集された書籍類は、一括して大阪市立大学に寄贈、「森文庫」としてしられ、その全容は「大阪市立大学図書館所蔵森文庫目録　上・下」としてまとめられている。

新村文庫

広辞苑の編纂などで著名な元京都大学教授・新村出博士の蔵書の一部。

小島文庫

万葉集研究の第一人者で、大阪市立大学名誉教授・小島憲之博士　の全蔵書。

恒藤記念室寄託資料　および　恒藤文庫

大阪市立大学初代学長・恒藤恭の関連資料、芥川龍之介と親交があった。

吉沢コレクション

吉沢英明氏所蔵の講談本を中心とする近代から現代にかけての大衆演劇資料。二〇二一年に新しく加わった。

他に、福田文庫（元東京商科大学教授・福田徳三博士の全蔵書）、ゾンバルト文庫（ドイツの経済学者ヴェルナー・ゾンバルト博士の蔵書の一部。経済学、特に社会主義関係の文献多数）内藤文庫（元京都大学教授・内藤湖南博士の蔵書の一部。中国古代史、史学、仏教に関する漢籍など）など。

三、上方学芸資料としての展開　＊学芸＝文学と芸能

森之宮キャンパス（二〇二五年開学予定）を中心に大阪（上方）学芸資料として大阪府立中之島図書館の大阪誌料に匹敵するものとして打ち出すことができるのではないか。

①文献と演者と

上方学芸資料は現代の演者と密接に関係している。

椿亭文庫　および　上方芸能資料

浄瑠璃・歌舞伎資料→久堀教授（文学部）
桐竹勘十郎（三代目）→　上方講座

森文庫

上方人物・和歌資料　→　西田

伏見屋文書

歌舞伎役者と遊女の関係など　佐賀教授（文学部）

謡本

喜多流を創設する北（後に「喜多」）七太夫は堺の出身で、秀吉に認められる。→（能）（喜多流）友枝雄人師

吉沢コレクション

講談資料→文学部・奥野准教授（文学部）・西田
旭堂南海　→　公開講座など
桂春団治（四代目）→落語講座

多くの蔵書は研究と一体になって、初めてその価値が確認される。さらにそこに演者が加わることで、古典研究、文献研究だけにはとどまらず（古典の世界だけには閉じず）現代にも開かれた視点を持つことができる。

②「学」としての芸能研究の伝統の継承

文献に基礎を置く地に足のついた研究（文献基礎学）が「市大国文」の伝統。

浄瑠璃・歌舞伎　森修先生、阪口弘之先生（ともに市大）
土田衛氏（大阪女子大）

能　伊藤正義先生（市大）
堀口康生氏（大阪女子大）

の学の伝統を継承する。文学史的環境から学芸を考える視点。さらにここに講談の研究が加わることになった。

新大学で喧伝される「総合知」を下支えする文献基礎学（＝古典知とよんでもよいかもしれない）の重要性を再認識させるためにも、これらの蔵書を改めて、学内、学外に知らせる必要がある。

特に、原典（原本）を所蔵することの強みを活かすことが重要。

◎象徴的に証明するものとしての漱石の自筆原稿
↓　江戸と明治は地続きである
↓　古典と現代も

『漱石自筆原稿　猫の墓』

第 2 章

〈吉沢コレクション〉受入れと整備の報告

搬出・搬入作業の過程

佐藤 敦子・佐賀 朝・奥野 久美子・橋本 唯子

0　吉沢英明氏旧蔵書受贈の経緯（本項執筆：奥野久美子）

吉沢英明氏の演芸資料コレクションは、学界のみならず、講談師、寄席関係者など、演芸界でも名高い。その数万点の貴重資料を受贈するという、一大事業の担い手に、なぜ大阪市立大学（以下「市大」、「本学」など）が選ばれたのか、また、どのようにして受け入れを進めたのか、その経緯を以下に報告する。

0-1　受贈のきっかけ

発端は、2020 年 3 月、吉沢氏より奥野へ一葉のハガキ（消印 3 月 10 日）が届いたことであった。そこには、「わが蔵書の運命…すべて姉上にお譲り…と考えています。具体的にはお勤めの大学に寄付、ご研究にお役立て下さい」「全てを総合するとン万冊、書庫、2 棟満員です」「又戦後の講談掲載誌（カストリ）も相当あります。又演芸のビラ、チラシ…すべて一括寄贈。」と書かれていた。

私は近代文学の研究、中でも芥川龍之介研究に携わる中で、芥川をはじめとする近代作家たちの複数の作品の材源が、講談本からとられていることを研究してきた。その過程で、二十年ほど前の院生時代に、京大国文研究室の先輩にあたる、実録・講談研究者の高橋圭一氏から吉沢氏をご紹介いただき、たびたび吉沢氏から講談本をお借りしていた。

しかし、吉沢氏に直接お会いしたのは一度だけ、同じくもう二十年ほど前に、吉沢氏と神田照山師に浅草を案内していただいたことがあるだけだ。そのとき

は、木馬亭で浪曲を聴き、駒形どぜうで鍋をごちそうになり、永井荷風ゆかりのアリゾナキッチンにも連れて行っていただいた。吉沢氏は入口の前で、「荷風ゆかりの店なのでここで荷風の話はしません」とおっしゃり、本当に店内で荷風の話は一切されなかった。そして、その日一日ご一緒するなかで、関西育ちの私に「浅草を愛してください」と繰り返しおっしゃった。

その後、郵送で何度も本をお借りし、そうして書いた拙論はもちろんお送りしてきたものの、また、年賀状だけは毎年お送りしていたものの、私は吉沢氏のご自宅すら一度も訪れたことがなかった。親しいとは決して言えない私とその勤務先の大阪市立大学に、吉沢氏はなぜ人生そのものである蔵書を託して下さったのか。この一大事業を担うによりふさわしい研究者はたくさん思い浮かぶし、吉沢氏のご自宅がある埼玉県を含む首都圏には、喜んで受け入れる大学や研究機関も複数あるだろう。

考えても合理的な説明はつかないのだが、想像をめぐらすならば、まず、整備に何十年かかるかわからない膨大な蔵書であるから、この先定年まである程度の年数がある研究者でなければならない。また、国文学・史学の専門家が複数在籍する昔ながらの文学部をそなえた大学か研究機関でなければ、整備ができないだろうとお考えだったのかもしれない。そして何より、大阪には吉沢氏と長年の交流があり、氏とその仕事を深く敬愛している、高橋圭一氏がいる。高橋氏と一緒に資料を整備してほしいということだろう、そう思った。

さっそく高橋氏に連絡して今後のご協力をお願いし、また、市大国文の先生方にもこの件をお伝えした。すると近世浄瑠璃研究の久堀裕朗氏が、「すばらしいお話だと思います。この話を、スペースの問題で断るようなら、本学にも未来はないでしょう」と言った。この言葉で迷いも晴れ、受贈の話を進めることにし、学情センター司書の中村健氏にも伝えて協力を仰いだ。中村氏は大衆文学・メディア史の研究者でもあり、本学に毎日新聞社から「サンデー毎日」全号を受贈した実績もある。

しかし、人生そのものである蔵書をすべて手放す、それは想像するだに困難なことで、吉沢氏からはその後二度ほど、「やはりあの話はなかったことに」という旨の、寄贈取り消しのハガキが届いた。

最初のハガキも入れると三度目になる寄贈の意向が示されたのは、吉沢氏から奥野への 2020 年 9 月 11 日付の封書だった。最初のハガキから半年後である。そこには、「ささやかな資料（本、チラシ、レコード、新聞類）は以後全て貴方に一任することにしました。五年後、大きな施設が完成するとか―（＊奥野注：大阪公立大 2025 年開設予定の森之宮キャンパスのこと）どうかご自由に処置してください」「実は親しい古本屋にチラシ類（当然演芸）を少しづゝ処理していましたが、心が何か晴れません」「（書庫は）四棟あり、雑本が分散してどうしようもありません」「とにかくわが蔵書の運命―お助け下さい」などと記されていた。

特に、「心が何か晴れません」という一言が、胸に刺さった。吉沢氏はやはり蔵書を古書店に売って散逸させることは望んでいない、氏の旧蔵書として一括収蔵・保存され、整備・活用されることを願っておられると思った。それは氏とその研究の恩恵を受けてきた多くの研究者や演芸関係者の願いでもあるだろう。

ただ、いつまたお気持ちが変わるかもしれない中では、受贈の話を具体的に進めることができない。そこで 2020 年 11 月ごろ、吉沢氏所蔵資料のごく一部の試験的譲渡を受けた。大きめの段ボール 4 箱分で、明治大正期の新聞の講談連載を切り抜き、綴じた冊子がほとんどであった。これらについては、すぐに簡易リストの作成にとりかかり、2021 年 3 月に簡易版データ入力は完了している。

中で、他にはない貴重な一点もの資料として、帙に川口松太郎の句と署名が入った、悟道軒圓玉の日記帳（亡くなる前年、昭和 14 年の日記）があった（図 0-1・図 0-2）。圓玉は吉沢氏が敬愛する二代目松林伯圓の弟子で、吉沢氏の著書『二代松林伯圓年譜稿』（平成九年　眠牛舎）は、明治三十八年二月の伯圓の死後も、伯圓関連の事績が書き連ねられており、昭和十五年一月の圓玉の死をもって結ばれている。川口松太郎は圓玉の書生兼筆記者だった。日記は口述筆記されたものと考えられ、そこからさらに清書されたものかもしれないが、内容を含めた調査研究はこれからである。

わずかでも蔵書を譲渡していただいたことで、吉沢氏が寄贈を決心されたこ

とが確認でき、受贈に現実味が出てきたため、関係者と相談のうえ、準備を進めることにした。

図 0-1

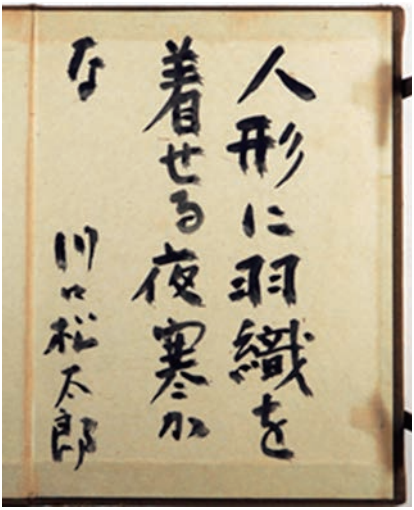


図 0-2

0-2　第１回予備調査

まずは吉沢邸を訪問し、書庫の状況を確認したいと思いつつ、コロナ禍に阻まれていたが、2021 年 3 月 22 日、ようやく訪問がかなった。その際、吉沢氏が案内してくださったのは、二階建て離れの一階部分書庫（メインの書庫、図 0-3）と、別棟の平屋書庫（図 0-4）の二棟であり、資料があるのはこの二棟だというお話だった。実は、前節で紹介した吉沢氏からの二通目の手紙を読み返せば、たしかに「四棟あり」と書いてあったのだが、そのことをすっかり忘れていた私は、7 月の選別作業時まで、資料があるのはこの二棟のみと勘違いしていた。

さらにこの日、吉沢氏のご長女と寄贈の件を具体的に相談することができたのだが、そこで判明したのは、書庫をすべて取り壊し、敷地に自宅を新築したいので、8 月上旬には資料をすべて搬出し、書庫を空にしたい、というご家族の意向であった。つまり、5 ヶ月弱で搬出・搬入までこぎつけねばならないこ

とになった。

図 0-3：二階建て離れ一階書庫

図 0-4：平屋書庫

余談だが、この日ご長女とお話をさせていただいた際、とても気さくで話しやすく、僭越だが気の合いそうな方だと思った。後述の 7 月の選別作業の際には、ご長女と私があまりに親しげに話しているので、「前々からのお知り合いですか？」と選別メンバーから訊かれたほどである。吉沢氏が私とその勤務先大学に蔵書を任せようと思ってくださったのは、二十年前、浅草で一日をご一緒した際、一人娘でいらっしゃるご長女と、似た雰囲気を私に感じてくださったからなのかもしれない、そんなことも思った。

0-3　本件にかかわって取得した学内研究費について

さっそく大学に戻り、すぐに学内の関係者に状況を伝えた。数人の関係者だけで取り組むことのできる事業ではないため、文学研究科に協力を仰ぎ、添田晴雄研究科長から、この受贈を文学研究科の事業として進めるという了承が得られた。さらに、副研究科長で近代日本史学が専門、なおかつ史料調査・保存の経験が豊富な佐賀朝氏が、受贈チームの中心メンバーとして参加することになった。また、大阪市立大学は来年度（2022 年度）、大阪府立大学と統合し、大阪公立大学となるため、大阪府立大学（以下、府大）の上方文化研究センターを統括している、西田正宏氏にもチームに加わってもらった。

ただ、受贈の話が本格化したのが前年 11 月以降であったため、科研費に応募ができていない。そこで、ともかくも絶対に必要な移送費を確保するため、複数の学内研究費に応募し、幸いにも 3 件が採択された。以下の①～③である。なお、名前の前に※がついているのが、吉沢コレクションの受入作業で中心となっているチームメンバーである。

①都市研究プラザ 先端的都市研究拠点 2021 年度「共同利用・共同研究事業」（総額 20 万円）

課題名「上方・大阪都市文化の研究拠点形成―大学アーカイブの整備と発信―」

研究代表者：※西田正宏（大阪府立大学人間社会システム科学研究科教授・和歌文学）

共同研究者：※高橋圭一（大阪大谷大学教授・近世実録、講談）

※橋本唯子（和歌山大学准教授、図書館副館長・日本史学）
武田悠希（立命館大学等非常勤講師・日本近代文学、大衆文学）
スティーブン・フィラー（オークランド大学（米国）准教授・日本近代文学）
※久堀裕朗（大阪市立大学教授・近世芸能、浄瑠璃）
※奥野久美子（大阪市立大学准教授・日本近代文学）
＊以上、講談本研究関係者
山村桃子（島根県立大学・日本古代文学（上代文学）、神話学）
水内俊雄（大阪市立大学・地理学、都市問題、アーカイブ）
桐山孝信（大阪市立大学・国際法学）
＊以上恒藤記念室資料研究、アーカイブ関係者

②女性研究者支援室 2021 年度連携型共同研究助成（総額 44 万 6 千円）

課題名「講談資料コレクションの収蔵とデジタル整備―講談師・初代悟道軒圓玉日記の翻刻校注を出発点として―」
研究代表者：※奥野久美子
共同研究者：※橋本唯子
※佐賀朝（大阪市立大学教授・日本近代史、遊郭史）
※久堀裕朗
菅原真弓（大阪市立大学教授・日本近世絵画史・版画史）
※西田正宏
※高橋圭一

③2021 年度文学研究科プロジェクト（総額 48 万円）

課題名「芸能文化資料の基礎整備と研究活用―上方文化の研究拠点形成をめざして」
研究代表者：※奥野久美子
共同研究者：※佐賀朝
※久堀裕朗
菅原真弓

海老根剛（大阪市立大学准教授・ドイツ文学、映画、視覚文化）
※森節男（大阪市立大学 UCRC 研究員・浄瑠璃）
※西田正宏

このほか、2021 年 1 月に申請し、6 月下旬に採択通知があったのが、2021 年度の三菱財団人文科学研究助成である。本助成は研究期間を選ぶことができ、期間は 2022 年 3 月～2023 年 2 月とした。本助成の構成員等については以下の通りである。

④2021 年度三菱財団人文科学研究助成（総額 300 万円）

課題名「講談資料コレクションの調査研究とデジタル整備―講談師・初代悟道軒圓玉日記の翻刻校注を出発点として―」
研究代表者：※奥野 久美子
共同研究者：※高橋圭一
※久堀裕朗
※中村健（大阪市立大学学術総合情報センター司書・大衆文学、メディア史）
武田悠希（立命館大学等非常勤講師・日本近代文学、大衆文学）

以上が本受贈に関連して採択された研究助成である。①～③はすべて 2022 年 3 月で終了し、④の三菱財団の研究期間が終わる 2023 年 2 月以降の予算確保については白紙である。

なお、吉沢コレクションの受入と整理作業には、ほかに本稿執筆者の一人である佐藤敦子氏（佐賀氏科研助手）と、本学学情センターより伊賀由紀子氏・井上佳代氏、学情センター元職員の島崎弘子氏（データ入力作業）が協力している。

1　第 2 回予備調査（本項執筆：佐賀朝）

2021 年 5 月 4 日、佐賀朝が吉沢邸を訪問し、書庫の予備調査を行った。

その際にも、案内されたのは二階建て離れの一階部分書庫（メインの書庫、前掲図 0-3）と、別棟の平屋書庫（前掲図 0-4）の二棟であった。数時間かけて両棟のうち、二階建て離れの一階書庫については概要調査を行った。そこでは、歴史学の現状記録法、あるいは研究者や社会運動家の個人蔵書の保存等に関する経験をふまえた概要把握方法を採った。すなわち、書庫全体のスケッチを作成（画像は稿末）し、すべての書架にナンバリングを行い、書架ごとの立面の写真を撮影した。スケッチと対照し、搬出の際に一つ一つの箱にもすべて書架番号を記し、データ入力の際にも箱番号と紐づけすれば、書庫の資料配置の復元が可能となる。実際に書庫の配置どおりに図書館で配架されるわけではないが、記録を残しておけば、その本が吉沢邸のどの棟にあり、どの書架の、どのあたりに配架されていたのかをたどることができる。

このような移送方法をとった理由には、研究者の書庫の資料配置はいわば「研究者の頭脳内部の見取り図」であり、後々までそれが復元できる状態にして受け入れることは、寄贈者に対する最低限の礼儀である、という発想があった。この点は、のちの調査でも二階建て離れの一階部分の前室や平屋書庫、あるいはガレージからの資料搬出の際にも同様の発想で作業を行うことにつながった。搬出後まもなく二階建て離れが取り壊されたことにより、写真・スケッチとナンバリングによる書架配置の記録は、今後、吉沢コレクションや吉沢氏の講談本研究の特徴を把握する上で意味を持ってくるのではないかと予想する。

図 1　吉沢邸二階建て離れ一階部分書庫の西面に配架された講談本

この調査により、書庫をはじめとする保管場所の再現性を重視した受け入れ

の方法が具体化した。

2　搬出作業（本項以降の執筆：佐藤敦子）

現在、大阪市立大学経済研究棟 1F 書庫に、数多くの講談本や芸能関係の史料群である「吉沢コレクション」（段ボール箱 590 箱）が仮置きされている。さらに、77 箱は大阪府立大学上方文化研究センターに一時的に別置されている。

これらは、吉沢氏が高校教師を勤めながら講談研究をてがけ、半世紀以上かけて蒐集した明治～昭和の講談関係資料コレクションである。当コレクションは、大阪市立大学で保管することが決まったが、2021 年 8 月には吉沢邸の建て替えが予定されていたこともあり（現在取り壊し完了）、早急に吉沢邸から搬出する必要が生じた。寄贈を受けた貴重なコレクションを無事に市大へ搬入するための調査・搬送作業には、遠距離であることやタイムリミットがあるなど、やむを得ない制約があった。搬出した箱数は実に 667 箱にのぼる。以下、本格的な史料整理に入るまでの、搬送のための調査過程および概要を記録しておく。

図 2-1　吉沢邸建物（佐賀氏作成）

2-1　7 月作業

2021 年 5 月の第 2 回予備調査の成果を受けて、7 月 22～25 日の日程で、大阪市大への搬出に向け資料の選別作業をおこなうことになった。吉沢家からは英明氏のご長女が対応し、調査者は当研究の統括者である奥野氏と、佐賀朝氏、久堀裕朗氏、高橋圭一氏、橋本唯子氏、森節男氏、筆者の 7 名であった。22 日午後から打ち合わせを行い、作業に入った。

事前準備　調査に向かう前に、奥野氏によりある程度の作業用具が現地に郵送

された。手袋、刷毛、マスク、防虫剤、ガムテープ、ハサミなどの調査必需品や、コロナ感染防止用のアルコール消毒液、ウェットティッシュなどが事前に準備されていた。長期間居住していなかったためトイレが利用できるか不安があったが、事前に使用可能であることが確認された。

作業は敷地内に点在する建物にわかれて行うことになったが、庭には樹木がうっそうと茂っており、見渡すことも困難な状況であった。そのため、別棟の作業グループとの意思疎通が不安に感じられるほどだった。佐賀氏が事前に綿密な作業工程を作成していたおかげで、前もって作業計画を共有することができ、作業工程表にならって、①二階建て離れ（書庫）、②平屋（書庫）の選別作業を行う予定であった。

吉沢コレクション調査 -週別 (2021年7月22-25日)の作業予定表　　2021.7.21改訂

月日	時間帯	場所	高橋	佐賀	佐藤	橋本	久堀	森	奥野	人数 場所別	人数 総数	作業内容
7月22日(木)	13:00～14:00			○	○	○	○	○	○	6		作業準備の上、まず各書庫の現状を確認、作業課題と分担について協議。
	14:00～17:00	書庫①(2階)	○			○	○	○	○	4	7	奥野・久堀は、課題A(ラベルのある書架2箇所の箱詰め試行)、橋本・森は、課題B(1階**前室**部分の整頓と探索、記号付与)を開始
		書庫②(平屋)		○	○					2		佐賀・佐藤で課題F(書庫全体の概要把握と書架・棚などに簡易なナンバリング)を進め、エリア単位で要搬出資料の探索開始。
7月23日(金)	9:30～12:00	書庫①	○			○	○	○	○	4	7	橋本・森は課題B(1階前室部分の整頓と探索、記号付与)を継続、奥野・久堀は、課題C(1階書架の上部・周辺資料の清掃・把握)に着手。
		書庫②		○	○					2		佐賀・佐藤は前日の作業(課題F)を完了させ、G・Hに着手。
	13:00～17:00	書庫①	○			○	○	○	○	4	7	橋本・森は課題Bを完了(可能なら搬出資料の箱詰めも行う)。奥野・久堀は、課題C(必要かつ可能であればDも)を継続。
		書庫②		○	○					2		午前中の作業を継続。できれば課題G・Hを完了。
7月24日(土)	9:30～12:00	書庫①	○	○	○		○	○	○	6	6	2～3チームに分かれて課題C・Dを継続。可能ならEも
		書庫②										――(前日までに要搬出資料の箱詰め完了すれば不要)
	13:00～17:00	書庫①	○	○	○			○	○	5	5	2～3チームに分かれて課題C・Dを継続。可能ならEも
		書庫②										――
7月25日(日)	9:30～12:00	書庫①		○	○			○	○	4	4	課題C・Dの継続と完了。状況によっては可能ならEも 10:00～**日通の久郷さんと打ち合わせ**
		書庫②										――
	13:00～17:00	書庫①									4	予備時間(課題C・Dが完了していない場合は作業を継続)
		書庫②										――

吉沢コレクション調査 -週別 (2021年7月22-25日)の作業課題

課題記号	場所	課題	分担	備考
A	書庫①(2階建て)	ラベルのある書架2箇所の箱詰め試行	奥野・久堀	
B		1階**前室**部分の整頓と要搬出資料の探索、特定、記号付与	橋本・森	できるだけ箱詰めも行う
C		1階書庫の各書架の上部・周辺にある資料の清掃・把握	奥野・久堀のち全員	橋本・佐賀が必要に応じて協力・サポートする
D		書架上部・周辺の要搬出資料の箱詰め		図書以外の搬出不要資料は可能なら撤去も行う
E		書架の要搬出資料の一部箱詰め(可能な範囲で)		時間があり、ラベルの準備が可能であれば行う
F	書庫②(平屋)	書庫全体の概要把握と書架・棚などに簡易なナンバリング	佐賀・佐藤	
G		書庫内のエリア単位で要搬出資料を探索し、特定する		
H		要搬出資料の記号付与と箱詰め(可能な範囲で)		
I	すべて	一枚絵、古文書類、浪花節ポスター・チラシ等の探索・確認	高橋	「リベロ」として各作業を監督・助言しつつ探索する

図 2-2　作業工程表

この時点では、二階建て離れの 1 階と平屋書庫の 2 か所を調査することになっていたのだが、二階建て離れの 2 階にも相当量の講談関係資料が残されていることが判明し、さらには高橋氏から、吉沢氏は執筆作業を母屋で行っていたこと、そのため母屋にもかなりの関係資料があるだろう、という助言をいただいた。急遽、二階建て離れの 2 階と③母屋も資料選別作業の対象場所に加えることとなった。

図 2-3 二階建て離れ「前室」

なお、7 月末の運送業者による梱包・搬出には立ち会うことができないため、混乱が起こらないよう、奥野氏が梱包の方法や番号の振り方などを記した詳細な指示書を作成し、業者に託すことになった（前室を除く二階建て離れと母屋は業者による梱包）。

以下、建物ごとに 7 月の調査作業を記録する。

二階建て離れ　ここには、倉庫のような「前室」があり、四畳半程度の広さにスチール製の書棚が置かれ、多くの資料が所狭しと配架されていた。作業を始めるにあたって、まずは通路を確保することから始めなければならなかった。「前室」の資料選別作業は橋本氏・森氏が担当し、講談本・希少と思われる新聞類を搬出し、段ボールに詰めた。作業空間の狭さと蒸し暑さ、それに埃には悩まされ続けた。講談本や新聞に掲載された講談の切り抜きが数多く保存されており、吉沢氏の執筆原稿も発見された。1 日半の作業で総数 29 箱分の資料を梱包し救出した。これらは 7 月 30 日に大阪府大へ搬入された。

図 2-4 二階建て離れ「書庫」

離れの一階「書庫」は今回の搬出のメインとなる場所で、吉沢氏が最も活用した図書類・講談本を配架した書庫兼書斎だったと思われる。広さ約 14〜15 畳、壁面に作り

付けの書棚、中央部にも所狭しと書棚が置かれ、すべて本・資料で埋め尽くされていた。壁面書架に東西南北と算用数字を組み合わせた番号を事前調査の際に付し（詳細は紙面最後の平面図を参照のこと）、それぞれ資料の選別をおこなった。奥野氏・久堀氏が担当した。搬出のための箱詰めは宅配業者に依頼しその指示のメモを書棚に貼っていった。7 月末の運送業者による梱包は、この書庫だけで総箱数 490 箱にも上った。

ここで講談本以外に、大正期の音楽・バレエ公演パンフレットが見つかったことは興味深かった。20 世紀前半に活躍した世界的なバイオリニスト、ミッシャ・エルマン、フリッツ・クライスラー、バレエダンサーのアンナ・パヴロワの来日公演のものだった。

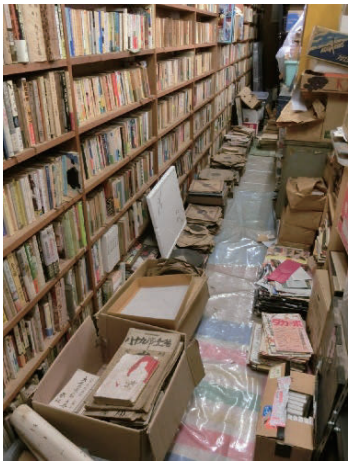


図 2-5 平屋書庫（中央床手前から奥はレコードの一部）

離れ二階部分は、寝室・台所・奥の間・廊下・流し台からも 40 箱に上る講談本・関係資料が見つかった。台所・流しといった湿気の多い場所のためカビの心配もあったが、比較的良好な状態であった（奥野氏・森氏担当）。一階書庫と二階部分の資料は、市大へ搬出された。

平屋書庫　二階建て離れや母屋からジャングル化した庭園を分け入っていくと平屋書庫にたどり着く。調査は、佐賀氏と佐藤が担当し、講談本とともに戦前の浪曲・落語等の SP レコードが大量に保存されていることが判明した。隙間なく家財道具が積まれ、床には大量の SP レコードが置かれていたため、まずは作業通路の確保のための力仕事にかなりの時間を費やした。ここでも現状記録を重視し、壁面書棚を東西南北と算用数字で表示し、スチール本棚・戸棚など様々な書架に番号を振りつ

図 2-6 通路確保後の平屋書庫（右側戸棚に「吉」屋号徳利）

つ作業をおこなった。

書庫の奥深くに到達した時、天井まで高く積まれたいくつもの段ボール箱が見つかり、この中には埼玉県域の近世〜近代文書が大量に保管されていた。主に上尾市史編纂と埼玉県史編纂の折に活用した地域史料群で、「原市　吉沢英明所蔵文書」と記載された箱が8箱（目録あり）、かつて市史・県史により整理・目録化されたものだった。この他、とくに整理がなされていないものも含め吉沢氏が収集した埼玉県域の近世〜近代地域史料が数多く保管されていた（約25箱）。この機会に、埼玉県文書館・上尾市史編纂室に管理を委ねるべく、佐賀氏が県文書館にコンタクトを取った。

地域史料が保管されていたことは、吉沢家が近世には酒造業を営んでいたということとも関係があるかもしれないが、酒造関係史料がその中に含まれていたかどうかを確認する余裕がなかったのは残念だった。近世吉沢家の痕跡を示す酒を入れる大きな徳利が何本も保存されていたことは興味深かった。平屋は講談本も多数保存されていたが、家や地域に関連する資料も保存されており、他の建物とは違う特異な空間だったと思われる。

書庫内の講談本・和綴じ本の類など48箱分梱包し搬出することとし、埼玉県文書館・上尾市史編纂室行きの箱と別置して7月の調査を完了した。

母屋　主に生活、執筆の場として最後まで使用された建物で、高橋氏が1・2階とも選別作業をおこなった。1階居間に講談本関係、2階和室に演劇などのポスター類が多くみられ、搬出箱数は12箱となった。

作業後、最近になって判明したことであるが、奥野氏によると講談本の最初期の形態を伝える松林伯圓（二代目）講述の『安政三組盃』（速記法研究会　明治18年）を探すため、吉沢氏に保管場所をうかがったところ、「母屋です。手元に置いていました」とのことで、実際に母屋２階から搬出された箱から同書が発見された。

市大搬入　7月30日、市大へ590箱、府大へ77箱の資料が搬入された。市大では経研棟書庫（管理は学情センター）、府大では上方文化研究センターに当面保管することとし、搬入には奥野氏ほか関係者が立ち会った。

2-2　8 月作業

図 2-7 ガレージ内の様子

搬入後、取り残し資料がないかどうかの確認のため、8 月 20〜21 日に計 4 名（奥野・佐賀・森・佐藤）で吉沢邸書庫の再調査を行った。7 月調査の時点では、新聞資料は主な搬出対象ではなかったが、主に二階建て離れで希少な新聞資料も見受けられたため、搬出することとした。

埼玉県立文書館・上尾市史編纂室の担当者も来邸し、調査の結果、7 月調査で見つかった古文書群は調整の結果、いったんすべて上尾市史編纂室に搬入することになった。今後、各機関と吉沢氏ご長女の間で調整を行い、上尾市域関係文書とそれ以外の文書に分けて、後者は県立文書館で受け入れになる予定である。

ガレージ　ジャングルと化した庭の端に、ひっそりと倉庫のようなガレージが建っていた。離れ・平屋・母屋を散々調査しつくし、少し早く終了できそうだという安堵があり、よもやそこには何もあるまいという根拠のない確信もあり、ガレージの戸を開けてしまった。すると、そこには壁際から中心部までびっしりとスチール棚が置かれ、段ボール箱等に保管された講談本・古文書、箱入りのレコード群があった。砂埃や害虫の糞の埃がたまっていたが、急いで作業に取り掛かったところ、思いがけず状態の良い講談本も多数見つかり、14 箱分の梱包をすることができた。ガレージの大半を占めたレコード群は、既存のレコード箱につめられたものもあれば、むき出しの状態のものも多数残されていた。

図 2-8 平屋書庫の SP レコード

全ての調査・選別作業を無事に終え、約 25 箱分の資料を追加収集し、9 月 1 日に市大経研棟書庫へ搬入した。

8 月調査では、特に講談本類の取り残しがないかどうかの点検、各所に保存された大量のレコードの確認、地域史料（古文書）を地元の公的機関で保管できるようにする橋渡しが主な作業内容となった。限られた時間と限られた労力で成しうる限りの資料保存ができたのではないかと思う。

平屋書庫には往年の SP レコードのプレーヤーがあり、それで再生を試みたところ、広沢虎造の懐かしい声が流れてきたのには感慨を覚えた。

これらも吉沢氏が人生の長い時間をかけて蒐集したものであり、全てを含めて吉沢コレクションなのだと改めて思う。同種類の SP レコードはデジタル音源で聴くことができたり同じ実物が他機関に保存されているものもあると聞く。しかし、実物はいったん災害に遭えば再生不可能となるかもしれず、想定外の災害が多い昨今、予算の問題は重々承知の上だが、数か所で同じ物を保存しておくことも、今後大きな意味を持つと思う。

3　箱目録の作成

配置場所	所在	箱番号表記	箱数	備考
市大経済研究棟	二階建て離れ1F書庫	東	76	他の箱に同封1（北中20-前2）。書籍が多数。講談本は少数か
		西	88	他の箱に同封1（南中1あまり）。西4～8の書架に講談本多数
		南	190	他の箱に同封1（西2-1）。南書架、南中10番代の書架に講談本多数
		北	136	他の箱に同封2（東5、2F流し上）。特に北5、北18～19に講談本多数。北中9以降は講談関係雑誌が多数
	二階建て離れ2F	2F寝室	16	
		2F台所	12	
		2F奥の間	9	
		2F廊下	4	他の箱に同封1（寝室）
		2F流し	2	
	二階建て離れ1F書庫	机（北4）	2	演劇台本、舞台写真
	二階建て離れ2F	額	1	
	母屋	母屋	12	1F3箱、2F9箱
	ガレージ	ガレージ	14	講談本多数
	?	無記入	25	
	平屋	平屋書庫	1	
府大上方文化研究センター	二階建て離れ1F書庫	南	1	南中18－7
	前室	前室	29	
	平屋	H	48	

図 3-1 資料出所別箱数（箱目録より）

市大搬入分 590 箱、府大搬入分 77 箱、合計 667 箱を吉沢邸から搬出したわ

けだが、搬出・搬入の時点では箱総数やそれぞれの建物の箱数の把握が困難であったし、当然ではあるが、搬入の際の書架への配置は箱番号順とはならず、東西南北等に分けた箱番号は混在して配架された。どの配架棚にどの箱が置いてあるのか、また建物（所在）別箱数が不明なままでは今後の整理作業に差し障りもあり、本格的な資料目録の作成もままならない。佐賀氏の提案で、まずはどの棚にどの箱が配架されたかを把握するための「箱目録」が必要だということになった（各所在別箱数が判明したのは「箱目録」作成後である）。

配架された市大経研棟内は、平置きして高く積まれた箱によって通路が塞がれ、箱に記載した番号も確認できない状態だった。「箱目録」作成にかかる前に、通路を確保する作業を行ったがこれが大変な重労働だった。「箱目録」作成の便宜上、各棚に五十音順にマーキングし、箱の所在がわかるよう目録を作成した。本来なら各箱を開封し中身の把握を行いたいところではあったが、箱の配架場所の把握という目的を優先し、搬出前の状況写真から箱の中身をある程度把握することとした。同様の作業を府大搬入分でも行い、箱の配架場所の把握という目的を達した。

現在、島崎弘子氏に本格的な資料目録「吉沢コレクション図書リスト」の作成をご担当いただいており、また橋本氏の尽力により和歌山大学においても授業の一環で資料目録を作成中である。今後、吉沢コレクションの全体像が見えてくることが楽しみである。

資料が搬入された後の最大の懸案は、害虫の存在である。搬出・搬入が夏〜秋で、冬の今は害虫の活動時期ではないため、目立った害は見受けられない。今後季節によって、橋本唯子氏や業者のアドバイスを参考に害虫・カビの駆除対策をとっていく必要がある。

おわりに

2 度に分けて行われた吉沢コレクションの調査の概要を以上にまとめた。

調査による作業は、該当する資料が元々どのような状態で置かれていたかを、記憶上・図面上でできるだけ復元できるよう現状記録を重要視して作業が行わ

れた。事前調査での状況写真と平面図は、建物自体が取り壊されてしまい、かつてあった書庫・書架の情報を得る手立てを失っても、資料がどこにどのように存在したかをうかがい知ることができる貴重な記録だと言える。史料残存の全体像がわかるように調査することが大切であることを再認識する機会となった。

2021 年 7 月末には吉沢氏と市大文学研究科との間で「吉沢英明氏所蔵資料の寄贈に関する覚書」をかわし、2022 年 1 月末に本学文学研究科長から吉沢英明氏へコレクションの受贈感謝状の贈呈も行われた。吉沢コレクションの一括での受贈は、講談関係資料蒐集・研究において影響力も大きいとのことから、2 月 9 日には大学 HP を通じて受贈を公表し、2 月 20 日には、講談師をゲストに成果報告会のイベントが、奥野氏を中心とする文学研究科プロジェクト共同研究者らによって企画、実施された。3 月末までには文学研究科特設サイトでの画像公開も行われる予定である。

2 月 20 日に行われた文学研究科によるオンラインイベント「上方・大阪都市文化の研究拠点形成―新収 吉沢コレクションを中心に―」の内容を紹介して本稿を締めたいと思う。

このイベントは、講談を中心とした芸能関係の数万点に及ぶコレクションの一括寄贈の報告と共同研究の成果報告も兼ねて企画されたものだった。コロナ対策のため Zoom での開催であったが、60 名を超える参加があったことからも、学内外での注目度の高さがうかがえる。以下にプログラムを掲載しておく。

『上方・大阪都市文化の研究拠点形成
—新収 吉沢コレクションを中心に—』

【日時】

2 月 20 日（日）14 時〜　zoom 開催

【プログラム】

はじめに

西田正宏（大阪府立大学高等教育推進機構教授・副学長）

大阪公立大学蔵　古典籍の資料性

西田正宏

吉沢コレクション受入れ報告—講談本と近代文学の関係に触れつつ—

奥野久美子（大阪市立大学文学研究科准教授）

吉沢英明氏の人と仕事

高橋圭一（大阪大谷大学文学部教授）

旭堂南海師に訊く

旭堂南海（講談師）

聞き手：西田正宏・高橋圭一・奥野久美子

口演 —旭堂南海師による講談実演・大阪ゆかりの演目から—

旭堂南海

イベントは 14:00 から開催され、大阪府立大学副学長で上方文化研究センターの西田正宏氏の司会で進行された。文学研究科長・添田晴雄氏は、吉沢氏の寄贈への感謝と、大阪公立大学の門出にふさわしい資料群であるとの挨拶を述べた。副研究科長・佐賀朝氏からは、当研究プロジェクトメンバーとして今後の支援を呼びかけた挨拶があった。

次に、「大阪公立大学蔵 古典籍の資料性」と題し、西田氏の講演が行われ、大阪府立大学・大阪市立大学の貴重書資料群の紹介とその可能性について解説があった。府立大所蔵資料は、2005 年に府立大に統合した大阪女子大学（旧大阪府女子専門学校）時代から教育に必要なものとして蒐集された古典籍、音楽

資料や芝居・浄瑠璃等の上方古典芸能に関する豊富な資料群であること、市大には地域史料を含め豊富な古文書史料群や文学・経済関係文庫、そして大衆演劇資料である吉沢コレクション等が所蔵されているとの紹介があった。とくに今後、上方学芸資料の可能性として、資料を介して研究者・古典芸能演者の協働の試みが期待されるとのことだった。

奥野氏の講演「吉沢コレクション受け入れ報告―講談本と近代文学の関係に触れつつ―」では、吉沢氏自筆の葉書も紹介しつつ、コレクション受贈の経緯や研究プロジェクト・資金の詳細、資料選別作業過程などの紹介があったのち、現段階での成果の一部として、貸本屋での講談本の貸し借りの実態や、近代文学に講談本がどのように影響したかなど文学と講談本の関係についてお話しがあった。

奥野久美子氏講演の一コマ（「吉沢コレクションの一部より講談本」）、2022 年 2 月 20 日

吉沢氏との交流も深い高橋圭一氏（大阪大谷大学）からは、「吉沢英明氏の人と仕事」についてのご講演があった。吉沢氏の履歴から生涯をかけて編綴した「講談目録、講談史、講談事典」の解説と紹介、「徹底して現物にこだわって、事実を追求した、基礎研究」について詳細な解説があった。

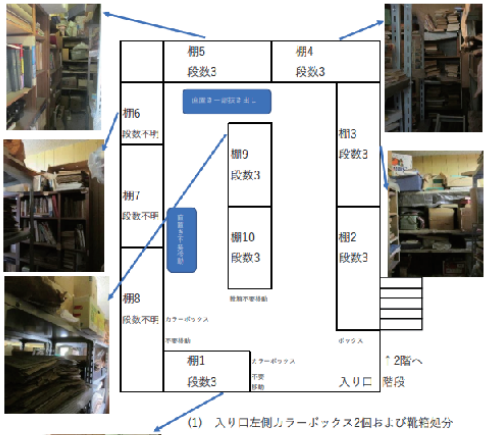
講演ののち、休憩をはさんで上方講談師・旭堂南海氏を交えた講演者との対談では、吉沢氏の講談作品の事典が演者にとって非常に重宝される労作であること、講談速記本の正当性について、「鼠小僧次郎吉」講談本の描写のリアリティがむしろフィクションを想像させるといった指摘もあり、文献・研究者・演者の協働がまさに垣間見られた興味深い対談であった。

イベントの最後は、旭堂南海師の講談、大阪ゆかりの演目、「大塩平八郎」の実演で締めくくられた。天保 8 年、大坂町奉行所元与力大塩平八郎の決起直

前に、その計画が仲間内の密告により露見していくという話だが、中でも、仲間が大塩に露見を知らせるため大阪を駆ける描写などは当時の市中が眼前に浮かぶようだった。

豊かな大学所蔵資料をめぐって、研究者による研究成果、演者の目線による解釈も交え、会は盛況のうちに終幕となった。

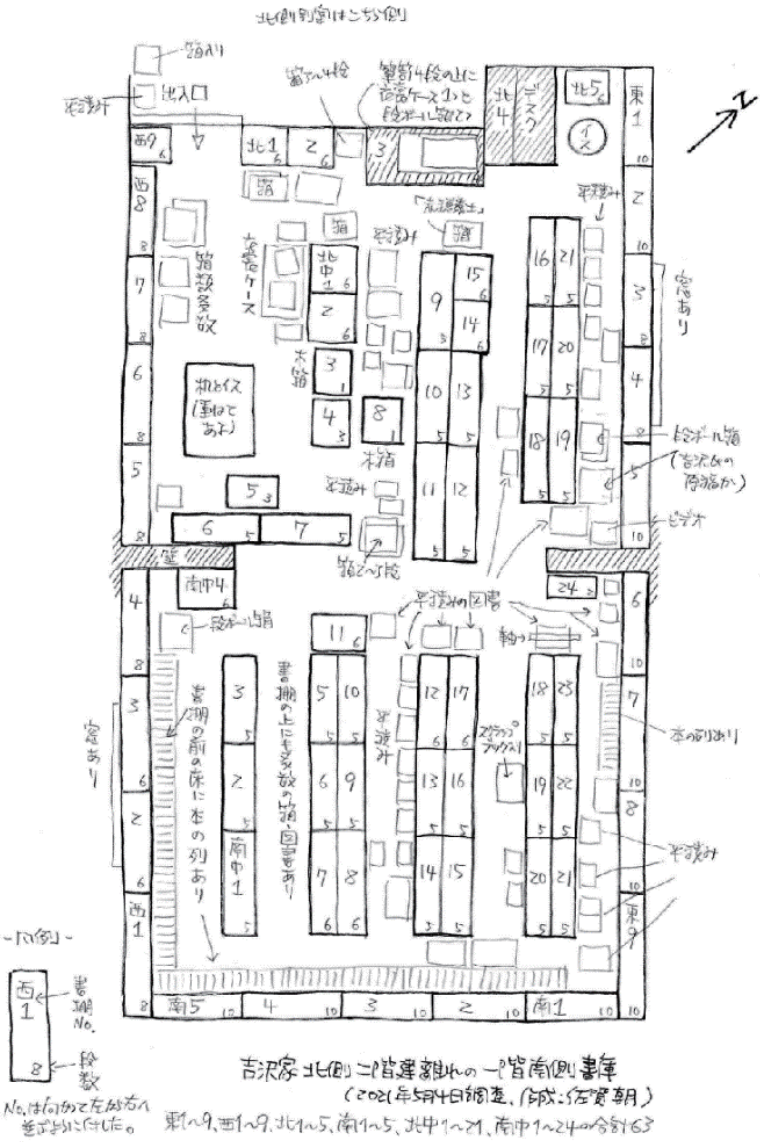
現在、吉沢コレクションの整理・公開作業は着実に進められている。従来、府立大・市大に所蔵されていた史料群に新たに吉沢コレクションが加わることで、近世・近代の芸能・都市文化史料は一層の厚みを増すことになった。大阪公立大学としての再出発の暁に、これらを用いた研究がより豊かに発展することを願うものである。



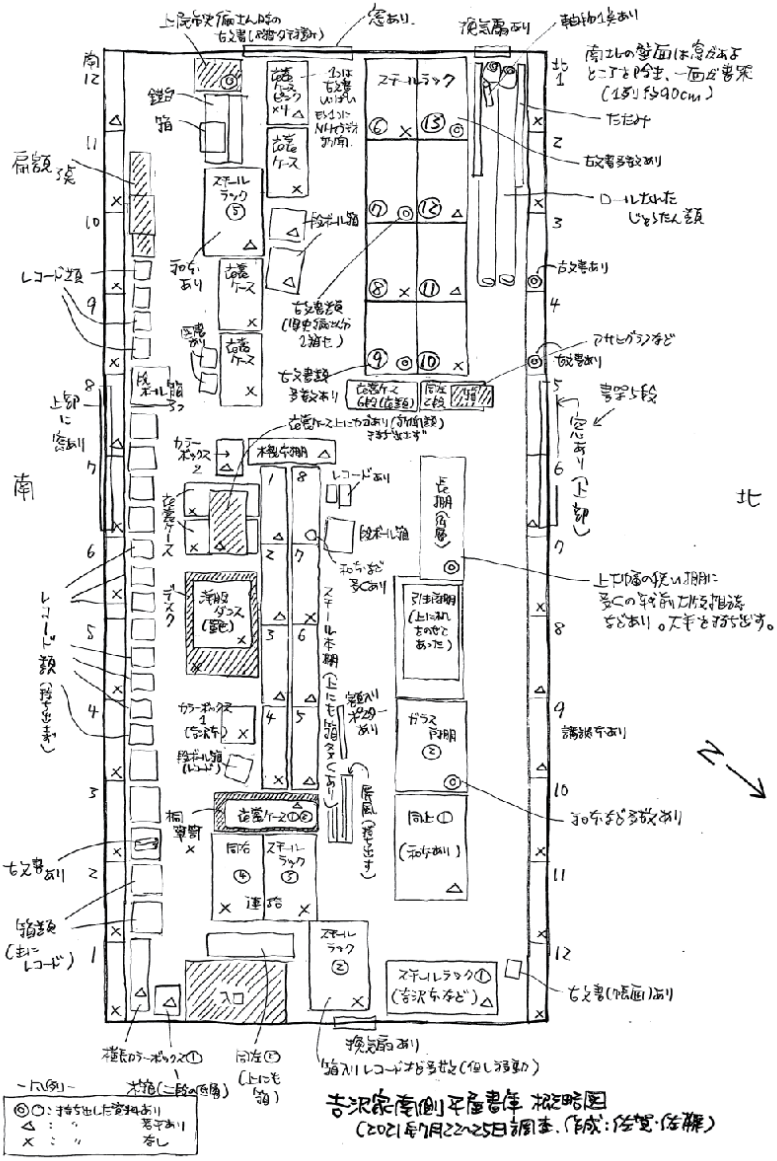
(1)　入り口左側カラーボックス2個および靴箱処分
(2)　棚1上部に極広資料など要資料
(3)　(1)・(2)および入り口正面ボックス前に要資料箱設置
(4)　すべて棚上部まで確認、現時点では**講談資料のみ**箱詰め
(5)　棚9・10付近を中心に『神戸又新日報』など新聞資料あり
(6)　それぞれ下段に大量のレコード、未確認
※棚数は便宜的に付与、箱詰めに極ね棚数順に

箱詰めのようす

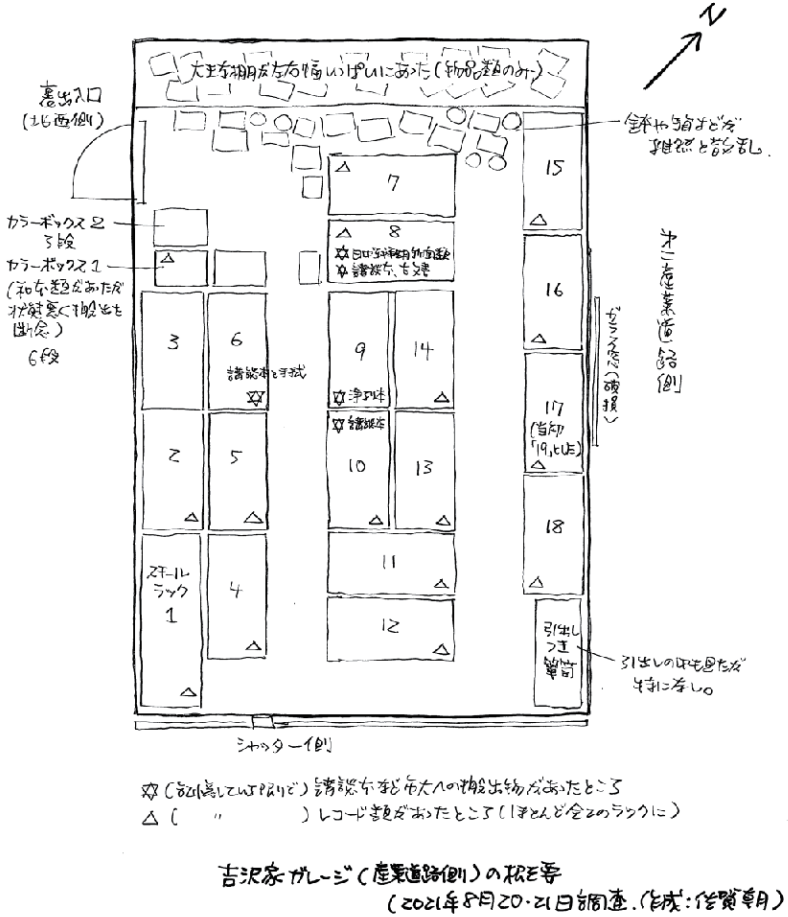
平面図①　二階建て離れ「前室」平面図（橋本唯子氏作成）
※中央部棚は２列あった。


北側別室はこちら側
箱あり
出入口
空きあり
ビデオ
本の列あり
書棚の前の床に本の列あり
書棚の上にも多数の箱図書あり
吉沢家 北側二階建離れの一階南側書庫
(2021年5月14日調査、作成:佐賀朝)
東1〜9、西1〜9、北1〜5、南1〜5、北中1〜21、南中1〜24の合計163
-凡例-
書棚No.
段数
No.は右から左へ右から左へ並ぶように付けた。

平面図② 二階建て離れ「書庫」平面図（佐賀朝氏作成）



平面図③ 平屋書庫平面図（佐賀朝氏作成）



吉沢家ガレージ（産業道路側）の様子
（2021年8月20・21日調査、作成：佐賀朝）

平面図④ ガレージ平面図（佐賀朝氏作成）

第 3 章

吉沢英明氏の人と仕事

高橋 圭一

（事前に配布した発表資料《若干の修正を施した》の間に、当日加えたコメントを挿入した。ゴシック体で表記しているのが、コメントである。）

＊吉沢氏の「吉」の表記は正式には「吉」であるが、氏の著書ではすべて「吉」で統一されており、本稿で引用した文章もほぼ「吉沢」としているため、以下本稿では「吉」と表記した。

○　吉沢氏の履歴

昭和 11 年（1936）7 月埼玉県原市町（現上尾市内）生まれ。

現在八十五歳、今も上尾市在住です。講談に関心を抱いたのは、中学生の時にラジオを聴いてから、だそうです。国学院大学在学中に講釈場に通うようになり、五代目神田伯山先生に傾倒されました。講談の大ファンになったのです。

昭和 34 年 3 月、国学院大学文学部史学科卒。卒業後は郷里で日本史の高校教師に。昭和 43 年神田村の「古本大学」に入学。（この年、夜間部に望んで異動。）

吉沢氏は空いた昼間の時間に、毎日神田の古本屋街に通い、速記本等の講談資料を買い集めました。講談ファンにとどまらず、氏はコレクターとなりました。

10 年余り夜間部に勤務し、後半は東京大学明治新聞雑誌文庫、同新聞資料センターに「通勤」。同文庫・センターには 10 年近く通い、講談資料の「発掘」に努める。

ファン、コレクターであると同時に、研究者になったわけです。

二十代の時、五代目神田伯山を敬慕し、以後、講談等大衆芸能に関するあらゆる資料を収集。退職後は、その山の中で、著述に専念する。

○　吉沢氏の仕事

氏には 20 点ほどの編著書がありますが、できるだけ紹介したいと思います。

吉沢英明氏の仕事を通覧して短くまとめると、「徹底して現物にこだわって、事実を追求した、基礎研究」と言える。もう少し具体的に述べると、「講談目録（カタログ）、講談史、講談事典」が氏の研究の三本柱。

１●『講談関係文献目録―明治・大正編―』恐らく氏の最初の編著です。

昭和 51（1976）年 1 月刊、A5 版　134 頁　私家版

氏の編著はすべてＡ５版、私家版（自費出版）ですので、以下では省略します。

❖序文「速記本（講談、人情咄）蒐集の意義」　東京大学助教授　延広真治 2500 字余より。

延広氏の文章は序としてはかなり長く、内容も示唆に富んでいて一読をお勧めしますが、今日は最後の一節のみ紹介します。

もし速記本を蒐集し一ケ所に保存する事ができるならば、その恩恵ははかりしれないものがある。

大阪公立大学が吉沢氏の蔵書を一括して保存することとなったのは、まったくすばらしいことです。

吉沢英明氏は自ら進んで定時制高校に職を奉じ、連日東京を中心に古書店をあさり、休暇には全国の古本屋を周ねく探索する一方、販売目録を悉皆とりよせて、貴重な文化遺産たる速記本の蒐集に全身全霊を打ちこんでおられるのである。明治新聞雑誌文庫を残した宮武外骨に対してと同様の畏敬の念を禁じ得ない。

目次

延広氏序文

講談界昔話　その一　　芹沢心道　明治 35（1902）年生まれの講談師

昭和 33（1958）年に引退し、当時埼玉県在住。

その二　　〃

その三　　〃→『桃川東燕昔日譚』昭和 52（1977）年刊。未見。

『桃川東燕昔日譚（続編）』昭和 53 年刊。

桃川東燕は芹沢心道の最後の芸名です。『昔日譚』の正編を読んでおりませんので、紹介はできません。

講談関係文献目録　　分量からして、本書のメインはこちらです。

凡例（冒頭「一　本目録は昭和 50 年 8 月現在、吉沢英明蔵書のうち、明治大正期の講談関係文献を分類編集したものである。」下略。（講談本で七八百冊））

第一冊目にして、吉沢氏の編著の特色が色濃く表れています。自分の蔵書で以て本を編む。講談本（単行本）のみならず、新聞や雑誌、江戸期に出た講談の種本である実録や、人気番付の様な史料も含む、といったことです。

一、新聞雑誌　　明治編

〃　　大正編

二、講談本　　明治編

〃　　大正編

三、読物実録本

四、番附その他一枚刷

五、講談参考文献

２●『講談資料集』

昭和 51（1976）年 11 月刊　158 頁

❖「はしがき」より。

本書は明治期の新聞雑誌を中心に、比較的珍しい講談に関する資料を一本にしたものである。もとよりこの種の文献には彼我の表現に若干の相違があり、厳密な意味での資料としては不満であるかも知れない。然し我々はこう云った資料を出来るだけ多く発掘し、再評価することによって、より正しい講談

史をつくらねばならないと考える。

収録された文献は、厳密な意味で資料とはしがたいものの、こういうものも含めて、「講談史」を構築せねばならない、と主張されています。

目次

はしがき
一、釈師列伝―「寄席の楽屋」より
二、邑井一資料抄
三、松林伯知資料抄
四、如何にして講談師と成りし乎
付録㈠　廿五年前の講談界
㈡　故蓁々斎桃葉
㈢　神田松鯉高座六十一年
㈣　残った講釈場へ行った記

３●『講談明治編年史』

昭和 54（1979）年 3 月刊　235 頁

本格的な講談史です。明治・大正・昭和（前中後）の全５冊から成ります。全冊の前書という性格もありますので、少し長く引用します。

❖「まえがき」より。

…私は明治の盛業たる講談の具体的様相を知るべく、東京大学明治新聞雑誌文庫にて過去二年間ほゞ連日多数の新聞を見てきた。而して数千点の関係記事を確認したのであるが、その内、信用度の高いと思われるもの千五百点を選んで本書を構成した。題して講談明治編年史という。元より新聞報道即真実というわけにはいかぬ。誤報もあろうし、記事にならなかった重要事件があったかも知れない。またさゝやかな一個人の調査である、重要記事の見落しも考えられよう。…有名無名の釈師が無数に登場する本書によって「講談」を再認識して頂ければ幸甚である。

❖「編集後記」より。

数年前のことである。偶々延広真治氏と雑談した折、明治新聞編年史や

風俗逼年史の類があるのに、芸能編年史がない、落語でも講談でも誰かやらぬものかなあ――と言われたことがある。又当時講談本の夢中男だった私に同情してか、何も買うばかりが能ではない、是非明治文庫を利用すべきであると、再々のお勧めを受けていた。

大川屋本をもって代表とする講談本の初出は明治の新聞雑誌にあり――こうにらんでいた私は早速同氏から紹介して頂き、…文庫に「通勤」した次第である。

❖「凡例」より。

一本書の各項は次の各紙から収録した。

として、以下、東京発行紙 46 紙、大阪発行紙 12 紙、京都発行紙 6 紙、名古屋発行紙 8 紙、其の他地方発行紙 44 紙を挙げる。

4●『講談大正編年史』

昭和 56（1981）年 1 月刊　243 頁

❖「まえがき」より。

（発表の際には時間の都合で略しましたが、この期の講談史で最も重要な事柄を押さえてくれている、と思います。）

かって荷風散人は雑誌娯楽世界に「築地草」を連載し、大正期の講談界を活写したことがある。この期の新聞には中央紙、地方紙をとわず講談速記が無数にあり、それが一度評判となるや活動写真にも演劇にもなった。また一人次郎長伯山ばかりでなく実に多くの講談師が全国いたる所、口演の旅を続けていた。故に講談は大正期においても民衆娯楽の雄として、一般社会から極めて高い評価を得ていたことになる。

「凡例」によれば、東京発行 20 紙、大阪発行 7 紙、其の他 27 紙が挙がる。

5●『講談昭和編年史・前期』

昭和 62 年（1987）12 月刊　243 頁

昭和 56 年から 62 年まで、かなり間が空いています。その理由については、前著「大正編年史」の「まえがき」に 55 年 4 月に全日制高校に戻っ

たことが書かれています。

❖「まえがき」より。

本書は既刊の「講談明治編年史」（昭和 54 年）「講談大正編年史」（昭和 56 年）の続編にして元年から二十年までの新聞記事を集めて一本としたものである。

この期は次郎長伯山、三馬術の伯鶴、義士伝で知られる貞山の三大巨人、ならびに伯山四天王といわれた伯龍、ろ山、山陽、伯治の最も活躍した時代である。また戦後の講談界に大きな足跡を残した伯山（当時五山）、馬琴、貞丈、貞山（当時貞鏡）の青壮年期にも相当する。本書によって激動期の講談界の状況が具体的に理解されれば幸いである。

「凡例」に拠れば、東京発行 12 紙、地方発行 16 紙、旧植民地発行 5（台湾、上海、京城、満州 2 紙）。

6●『講談昭和編年史・中期』

1989 年 2 月刊　245 頁

❖「はじめに」より。

本書は昨冬刊行した「講談昭和編年史・前期」に続くもので、21 年から 45 年まで 25 年間の記録である。

この期には敗戦の混乱にもかかわらず、上野広小路に本牧亭が開業（復活）、そして民間放送の誕生により日常的に多くの講談が全国隅々にいき届いたこともあった。（この後、吉沢氏の中学時代の講談体験あり。）

ここまでの『編年史』により（後期は平成 3 年刊です）、平成 2（1990）年度人文科学協会賞（京都大学人文科学研究所）受賞。

7●『講談昭和編年史・後期』

1991 年 4 月刊　253 頁

❖「はしがき」より

本書は昭和の後期、即ち 46 年から 64 年 1 月まで 18 年余の記録である。

この期には斯界の長老服部伸、神田伯山、宝井馬琴の各師が相次いで没している。また講談界の分裂につぐ分裂、そして大合同、加えるに女流講談の台頭など何かと話題の多い時期でもあった。

この編年史５冊は、講談史について何か書こうとする際には、たとえ短いものであっても、参照しないわけにはいかない、そういう本です。

８●『講談・落語等掲載所蔵雑誌目次集覧―大正期―』

1994（平成 6）年 3 月 20 日刊　103 頁

❖「発刊にあたって」より。

本書は大正期の所蔵雑誌 101 種・845 冊をアイウエオ順に列記し、それ等に収録された講談・落語の演題、演芸記事等を目次から抄出したものである。

編者は、既に昭和 51 年 1 月に「講談関係文献目録」―明治・大正編―（このプリントの１です）を私刊しており、類似出版の積極的意図はなかった。しかし二十年近く経過し、蔵書も倍増している筈である。また山本進氏の熱心なお勧めがあり、…初めて本書が誕生したという塩梅である。

奥付の経歴に「高校教諭を勤めたが現在諸芸懇話会会員」とあります。この年までに退職されていたようです。（追記　55 歳で退職されたそうです。）この後、氏の著作のペースは格段に速くなります。

９●『講談明治期速記本集覧　付落語・浪花節』

1995（平成 7）年 4 月 1 日刊　413 頁　　これまでで最も厚い本です。

❖「推奨のことば」宝井馬琴（注　六代目　2015 没）より。

氏は講談を愛して三十年、文献的収集と研究に熱中されるのみならず、実によく講釈場に足を運んで下さり、これほど熱心に聞いてくださる常連さんは皆無である。

最初の氏の履歴のところで、氏が講談の大ファンとなったと申しましたが、そのことはずっと変わりませんでした。

❖「発刊にあたって」より

本書は所蔵文献の内明治期に刊行された講談速記本を五〇音順に列記し、各々に多少の書誌的解説を付したものである。その大要は凡そ次の如くである。

甲　基本文献（各種の速記本）――「2681 点」

一、新聞連載切抜綴本、新聞附録冊子――「480 点」

二、雑誌連載、雑誌附録切取綴本――「60 点」

三、単行本――「2059 点」

四、新聞一枚物（原紙の儘バラで保存）に掲載された速記類――「82 点」

各項には一部の書き講談ならびに共通の演目の多い浪花節、落語速記を含む。一と二は旧蔵者の自家製本。他に各種の雑誌を蔵するが、単行本の紹介が主眼であるから詳しくは延べない。

乙　二次的文献（前項の内容を理解するのに参考となり得る同期の単行本類。）「395 点」　中略

氏が集めたのは単行本だけではありません。新聞連載切抜綴本、新聞附録冊子は読者が自分用に手作りしたもので、見た目は埃っぽくて薄汚い古新聞に過ぎません。そういうものの資料的価値を熟知して、吉沢氏は収集しておられました。なお、乙は講談本ではありませんが、素材が講談と共通するものです。

元来講談は釈場で聞く都市の芸能であったが、明治に入るや新聞雑誌を通して読む芸能として全国を席捲した。また連載完結後は直ちに単行本となり、地方で営む貸本屋の大歓迎を受けたのも事実だ。大川屋に代表されるいわゆる〃赤本〃がこれである。

しかし速記本は娯楽の多様化によって読み捨てられ、その上本自体が酸性劣化で雲散霧消の運命にある。僅かに三千余点の紹介であるが、実際は

この何倍、何十倍の講談文献が刊行されたと考えて誤りあるまい。　下略

講談速記本とはいかなるものか、吉沢氏が端的にまとめられた文章です。最後の「この何倍、何十倍の講談文献が刊行された」というのは事実でしょうが、講談のネタが、ここに挙がっているものの何倍・何十倍もあったわけではありません。

速記本の最後には、本屋の発行書目録がよくついています。そこには速記本とは書かれておらず、「講談小説」或いは単に「小説」とされるのが常です。「明治時代に『小説』と言うと、講談速記本のことですよ」、と吉沢氏から教わったことを覚えています。

❖「あとがき」より。

…「新聞講談」は全くの未開拓、殊にあれほど盛んだった講談附録の具体的報告は皆無である。大昔、前田愛氏（立教大）から新聞関係の詳細な調査を強く勧められたが、今日迄そのご教示が念頭から離れることがなかった。幸い本書によって一般読物も含め全国各地の新聞附録と連載物の現物六百余点を紹介することが出来、責任の一端を果したと自負する次第である。

10●『二代松林伯圓年譜稿』

平成 9 年（1997）２月 8 日刊　171 頁

二代松林伯圓は、明治時代に三遊亭圓朝と人気を二分した演芸界の大立者です。

❖「凡例」より。

一、本稿は初代の生誕から二代目死後の「事件史」迄およそ一三〇年間の記録をもって構成した。

文化 9 年（1812）～昭和 15（1940）年までです。最後の記事は伯圓の弟子悟道軒圓玉の死です。（本書 25 頁参照。）

一、使用した資料は原則として当時の新聞・雑誌・速記本の類であるが、各項文末に（　）してその出典を明記した。

11●『松林伯圓作品集』【一】

平成 10（1998）年 2 月 8 日刊　165 頁　　伯圓作品の梗概を記したものです。

❖「凡例」より

一、伯圓の作品は五十音順に配列して演題名には●を冠した。

一、共通の素材を扱った他の演者による作品は、伯圓の次に列記して▲を冠した。

一、●▲共に各々の速記を要約したものであって、出典は文末に≪　≫で示した。

伯圓のみならず、他の講談師の演じ方も知ることが出来るわけです。

本叢書は伯圓作品を網羅的に紹介する事を主眼とし、【二】以下も順次刊行する。

10 冊刊行する予定だったようです。

目次　凡例　安政三組盃　飯岡助五郎　大久保彦左衛門　大久保武蔵鐙　鏡山　茅野三平　関白秀次　雲霧仁左衛門　芸妓の操　孝女花扇　小猿七之助　小雀吉五郎　山谷の雪　佃の白浪　つゞれの錦　天保六花撰　鳥追情史（阿古代・源三郎）　春の山雀　目出鯛　雪振袖　雪夜情誌　洋婦の幽霊

〇特別寄稿　「松林伯圓と筒井政憲」　中込重明（同氏『明治文藝と薔薇　話芸への通路』右文書院　2004 年刊所収）

中込氏は落語・講談の優れた研究者でしたが、残念なことに夭折されました。

12●『松林伯圓作品集』【二】

平成 11（1999）年 1 月 30 日刊　119 頁

目次　凡例　嘘つき弥次郎　小栗判官　菅公　源三位頼政宇治の血戦　源三位頼政の最期　高嵩谷　助六伝（助六の実録）鼠小僧次郎吉

〇特別寄稿　中込重明　「松林伯圓を巡る人々―高野長英・遠山左衛門尉景元ほか―」（前掲『明治文藝と薔薇　話芸への通路』所収。）

同　神田翠月　翠月師の文章中「さて、吉沢氏は十年計画とかで、伯圓の

作品を網羅的に紹介することを悲願となさっていると聞いております。」

13●『講談明治期速記本集覧　二輯』　　ア～カ迄です。

平成 12（2000）年 2 月 8 日刊　141 頁

（吉沢氏の私信には「ワ行迄は五輯かかる」と。また「（仮）講談作品小辞典は五百作のあらすじを載せる予定だが、二百に達した」、とありました。）

この後の『講談作品事典』に、興味の中心は移っていかれていたようです。当初の『事典』が、代表的な作品の梗概のみを記すおつもりだったこともわかります。

❖「序」　中込重明　より

我々が、まず知りたく思い、しかも常々関心を寄せるのは、一表現者がどう思ったかという事よりも、圧倒的に事実の記載であり、往々にしてその事実の列挙である。

独創的なるものは、この先の産物であり、地味だが堅実な基礎作業を礎にせねば成らぬ代物である。

前出中込氏の推薦文です。私が最初に吉沢氏の仕事を通覧して短くまとめると、「徹底して現物にこだわって、事実を追求した、基礎研究」と言えるとしたのは、中込氏のこの文章にほぼ拠ったものです。

❖「あとがき」より。

本書は既刊書（平成 7・3 刊）の続編であるが、三輯（キ～）以下も順次刊行する予定である。

14●『演芸界面白噺』

平成 13（2001）年 1 月末日刊　131 頁　70 部限定。

❖「発刊の趣旨」より

本書は広く演芸愛好者、寄席ファンに面白く読んで頂くための各種資料を収録したものである。従って学術研究の参考文献となり得ぬことは当然であろう。

とは申せ、明治～大正期の芸能界の実態が面白く生き生きと描かれてお

り、虚実ない交ぜの部分は遺憾であるが、概ね一つの世相史として理解できる。

冒頭「演芸愛好者、寄席ファンに面白く読んで頂く」で始まり、これまでの吉沢氏の編著とは少々印象を異にしますが、やはり歴史を知るための資料と捉えられており、根底は変わりません。

❖「凡例」より。

明治期 2 点、昭和戦後期 1 点」を除けば全て大正期の雑誌である。

目次　古今講談師譚（空板生　本文より）、東京趣味と大阪趣味（在大阪東西閑人）、京都の寄席（瀬戸閻太郎）、鹿釈往来（孔雀舟）、温泉場（辰巳老人）、浪花節論（市村俗仏）、寄席がき（与二郎）、寄席見物記（相楽地水）、寄席の研究（なし）、芸壇の名物競べ（歌川飛燕）、台本としての講談雑話（活動写真）（吉山旭光）、落語家花形九人揃ひ（成田小僧）、色物寄席掻記（丁字楼）、浪花節銘々伝（黒風白雨楼主人）、悟道軒茶話（抄録）、講談生活五十年（神田伯鱗）、追加（月刊誌・娯楽世界より）。★特別付録・折り込み「明治二十五年改正・東京浪花節競」（カラー版）

このプリントの 8 は『講談・落語等掲載所蔵雑誌目次集覧―大正期―』でした。大正期の雑誌を、演芸記事を求めて渉猟した第一人者である吉沢氏が、選りすぐった「面白噺」です。講談・落語に加えて浪花節、さらに娘義太夫の噂等も含まれます。氏の本は概ね稀覯ですので、長くなりますが目次を全部載せました。

15●『続　演芸界面白噺』

平成 14（2002）年 3 月 1 日刊　155 頁

目次　講談としての世話物（辰巳の老人）、講談ネタグラシ（辰巳老人）、宝井馬琴――落語講談名家かがみ（四）（からいた）、高座の癖（森暁紅）、評判名家選（講談・落語）（上）（森暁紅）、評判名家選（講談・落語）（下）（森暁紅）、大阪の落語界（暮秋楼）、名人・非名人（大阪芸人の面影）（古井斤一）、落語研究会（やもじ（投））、当代落語家三十人（正岡楓峡）、寄席廻り（芝廼舎僊士）、

寄席集（注、筆者名を記さない）、寄席と芸人（鬼太郎）、不器寄席物語（鬼太郎）、高座外の浪花節芸人（なし）、桃中軒雲右衛門（石原松渓）、雲入道気焔縦横（市村俗仏記）、イカサマ征伐―二代目雲右衛門問題（かおる生）、芸談一声（雲井不如帰）、浪花節短評（中村泰治）、浪界駄言（渚の人）、浪界落書（風来神）、復活したる巴右衛門（九州浪人）、清翁と昇之助（相楽地水）、東都娘義太夫（礫川生（投））、筑前琵琶の今昔（鈴木旭秋）、一月に於ける横浜の演芸界（横浜　山野芋作（投））

16●『演芸界面白噺（三）』

平成16（2004）年8月吉日刊　136頁　　同封の私信（この本と一緒に送られてきた手紙です）に「現在講談作品小辞典（仮題）二六〇余点脱稿、五百がめど」とあります。また「毎日午前三時前に起きて（あらすじ書きを）終日やっており体クタクタにつき失礼します」とも。

私が直接伺った際には午前2時に起きる、と言っておられたように記憶します。就寝は午後7時です。夜中に起きて、午後には健康維持のためにサイクリングをする。時折寄席に行く（どれくらいのペースであったかは存じ上げません）以外は、ほぼ自宅に引きこもって、御自分が集めた文献を読み粗筋を取る、そういう生活を15年以上続けられました。

目次　　釈界回顧録（山の手の鳥）、大道講釈（辰巳の老人）、講談界の二変人（辰巳之老人）、講談を聴く心持（春波生）、泥棒伯圓（近世名人評伝　三）（鬼太郎）、伯山が治（ママ）郎長か治郎長が伯山か（暁紅）、講談師小伝（講談落語集）筆者名ナシ、落語家小伝（講談落語集　単行本）（筆者名ナシ）、円朝の話（近世名人評伝）（鬼太郎）、講釈師の耳で聴いた名人三遊亭円朝の人情噺　恰も今年の二十五回忌に因みて（悟道軒円玉）、合同演芸界を聴く（三遊・柳）（三月二日・変生）、春風亭小柳枝（落語家真打月旦）（野寺吉之助）、三語楼の芸風（席亭人気者）（しょうぞう）、落語与太話（桂三五郎）、吉田奈良丸（浪界評論）（狭山孤影）、若返った雲右衛門（紫頭巾）、鼈甲斎虎丸の印象（豪放と清艶を兼ね備へし芸術である）（紫頭巾）、伊藤高麗右衛門の意気（春野若草）、雲月君足下（浪界の現状を論じて足下の活躍を促す）（黒装束）、浪花節噂の聞書

き（浅香紫葉）、女義太夫楽屋の繰言（上下閑人）、当世癖さがし（なし）、滑稽競（１）（丁字舎）、滑稽競（２）（丁字舎）、大入場（１）（おに）、大入場（２）（おに）、全く情けなくなる＝山の手の寄席＝（佐藤鳴皐）、大阪もの、浅草を笑ふ（三土半也）、浅草与太ある記（島川七石）

17●『続講談明治期速記本集覧』

平成 16（2004）年 8 月 15 日刊　483 頁　「ア」から「ワ」迄。

❖「あとがき」より。

本書は次の各書の続編で四冊目に相当する。即ち

「講談明治期速記本集覧」（平成 7・4・Ｉ　このプリントの 9 です。）

「講談明治期速記本集覧」二輯（平成 12・2・8　このプリントの 13 です。）

「講談明治期速記本集覧」三輯（未刊）

以上に続き、要領は全て既刊書の通りである。いさゝか特色を記せば全国各地の新聞連載や附録類を紹介したこと、明治～昭和戦前期の雑誌より関連記事を注記したことであろう。一年後に「続々明治期速記本集覧」も刊行するが、とにかくこの種の文献は無尽蔵、完璧を期することは到底不可能といわざるを得ない。が、さゝやかな本書に触発されて真の研究者が一日も早く誕生することを切望する。

「続々集覧」は刊行されませんでした。原稿は用意されていたはずですが。このような目録を作るのであれば、どこかで一度集書を止めて、その時点で持っている本で作成しなければいけないでしょう。ところが、吉沢氏はどんどん蔵書を増やしてしまう。ですから、しばらく時間が経つと新たなリストを作るという作業の繰り返しになってしまいます。後進にとってはちょっと使いにくいところがあるのです。全部読めばいい、と言ってしまえばその通りなのですが。

波線部の最後で、吉沢氏は自分の仕事は基礎研究であって、これから「真の研究者」が誕生することを切望しておられます。

18●『講談作品事典』（上　ア～コ）（中　サ～ノ）（下　ハ～ワ、追録）

平成 20（2008）年 10 月 1 日（三冊同時刊）1895 頁

❖（序）「未曽有の快挙」三代目・神田松鯉（現・人間国宝）より。

「項目の数にも目を見張るが、適切な解説は収集された速記本や各種資料をすべて読破して、頭に入っていなければできない仕事である。」

この『事典』のとりわけ「解説」の値打ちについては、講談師である旭堂南海先生に、補足して頂きたいところです。

「決・定・版」　高橋圭一　「吉沢さんは大衆芸能史料の、人も知る一大コレクターである。いや単にコレクターと称するのは適切ではない。吉沢さんは収集自体を目的としているわけではなく、その膨大なコレクションを実に丹念に読みこんでおられる、稀有な研究者である。…頂戴したお手紙から引かせていただくと、「できるだけ正しいと思われる速記を正確に読んで粗筋（あらすじ）を記」されたとのこと。「正しい」とは、そこに名前の書かれている講談師が実際に口演したと考えてよい（そうでない場合が甚だ多いことは、吉沢さんに実物教育を受けた）、の意である。看板に偽りのない速記本であると、吉沢さんが保証してくれているのである。「正確に読んで粗筋を記す」ことは、想像以上の難事である。

❖「凡例」より。

一、明治～昭和期を中心として各種講談（見出しのみ入れて 4,750 余）を五十音順に列記した。

二、各項共原則として梗概＝演者名、出典（単行本には「　」、新聞名には<　>、雑誌名には“”を加えて巻号数も記す）、刊年月、補足（※の部分。無いのもある）の順に記した。

七、速記者名はすべて記さない。いわゆる書き講談、架空講談師の類も収録した。

一四、編者の所蔵する新聞、雑誌等のみを使用したが、本書で講談作品のほゞ

全容が理解できる筈である。

❖書評『國文學　解釈と教材の研究』平成 21（2009）年２月臨時増刊号　鈴木圭一　より。

私家版の書評は珍しいと思います。鈴木圭一氏は近世文学の研究者で、落語・講談に造詣の深い方でした。

明治以降の事例をもう少し記そう。「浮城物語」「義血侠血」をはじめとする小説を題材にしたものの項目があり、「仮名垣魯文」・花袋（←「石見武勇伝」）・馬場孤蝶（←「渋川伴五郎」）・金子光晴（←「三方が原の合戦」）など作家と講談の関わりも当然書かれる。また「乃木大将」・「東郷平八郎」・「児玉将軍と掏摸（すり）」といった時の軍人、下って「工場も闘う」はじめ第二次大戦時の時局ものも立項され、…ほかに「レ・ミゼラブル」「人肉質入裁判」「白野弁十郎」など多くの洋物、「宋朝水滸伝」「三国志」など中国種も当然扱う。…『事典』の収録の幅の広さを賞賛しています。

最後に、吉沢氏はただ詳しいのではなく講談をこよなく愛している、ということをあらためて記しておきたい。「し」の項目最初に神田茜の現代講談「幸せの黄色い旗」を掲げられていることがそれを端的に示す、と私は思う。

神田茜師は当時まだ若手の女流真打でした。氏は茜師のネタを講釈場で聴いて、事典に載せたのでしょう。鈴木氏が言われる通り、ずっと講談ファンだったのです。

19●『講談作品事典　続編』

平成 23（2011）3 月 1 日刊　795 頁

同封の私信に「伸の芋作時代の新講談、佐野孝の書き講談、浪曲等が中心です。　コピーの如く「大衆芸能図録」に関心を移しています。「続々編」目下 200 字×2400 枚程度、ン年後に私刊予定です。」

『続々編』は刊行されませんでした。

❖「凡例」より。

一、要領は正編と同一であるが、講談と関係ある浪曲、それに新講談、書き講談の類を中心とし、五〇音順に列記した。

吉沢氏は自ら集めた膨大なコレクションを、驚異的な持続力で丹念に読み続けた人である。このコレクションが公開された暁には、各自の問題意識に従って、いろいろな使い方がなされるだろう。が、閲覧される人たちの中に、吉沢氏のように、片っ端から読みふける人も現れて欲しいと思う。

私は個人的に、若手の講談師に大いに読んで欲しいと思います。

吉沢氏には、以上に上げた以外にも多くの著述が有ります。

その他●『大衆芸能資料集成』(第5巻・三一書房　1981年　21作の吉沢氏架蔵の速記本の活字化、及び解説)、『日本芸能人名事典』(三省堂　1995　執筆者名はなし)、『講談五代目寶井馬琴名演集（ソニー　架蔵はＣＤ11 枚組)』「別冊解説書」所収「講談の歴史」、さいたま市立博物館　第30回特別展「足踏みオルガンがやってきた！唱歌から浪花節まで・うたをめぐる近代史」平成18(2006)年　図録Ⅲ章「語り物の引力―浪花節の大ヒット」。『日本古書通信』『上方芸能』『講談研究』『諸芸懇話会会報』『民俗芸能』『山陽（改名して山翁）えくすぷれす』『PAPAN』『月刊浪曲』等に珠玉の大量のエッセイあり。

上記には稀覯の小冊子も含まれており、私が読んだのは一部に過ぎないでしょう。

吉沢氏の学問、「吉沢学」を極める為には、是非その全容を知りたく思います。

第 4 章

『上方・大阪都市文化の研究拠点形成

―新収 吉沢コレクションを中心に―』より

「旭堂南海師に訊く」（zoom 座談会）

旭堂 南海（上方講談師）

聞き手：西田 正宏・高橋 圭一・奥野 久美子

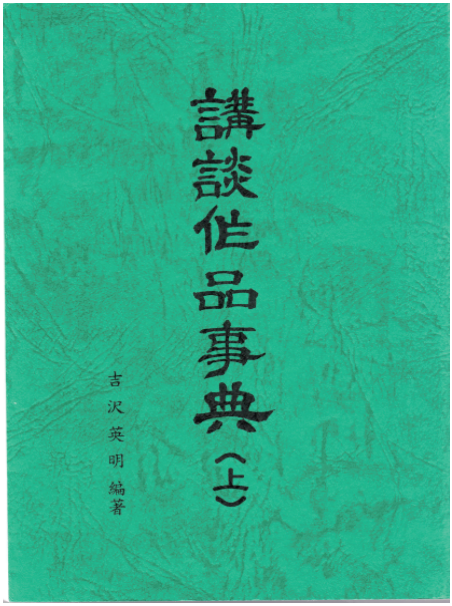
西田　ただいまより第二部の座談会を始めたいと思います。だいたい三十分ぐらいでしょうか、旭堂南海さんにご登壇いただいて、少しお話を伺うという機会を持ちたいと思います。今発表いたしました私が一応司会進行の形で、奥野さん、高橋さんにいろいろ代表としてお聞きいただくことにします。本来ならフロアからもいろいろご質問をいただけたらありがたいんですけれども、時間のこともありますので、代表の質問をさせていただくということでご容赦ください。それでは一番最初にですね、私のほうから直球の質問で恐縮なんですけれども、まさにこの吉沢コレクション、吉沢さんの御本と、南海さんの関わりというか、講談師としての関わり方といいますか、そのあたりのところをまず取っ掛かりとしてお聞かせいただければと思います。南海さんよろしくお願いします。

南海　はい、よろしくお願いいたします。関西では先年お亡くなりになりました四代目の旭堂南陵という、あの方がたくさん講談の本をお集めでございました。その資料を実は私はこの世界に入った時ですかね、正確には入る前ですがね、お見せいただいたのが、速記本というのを初めて知ることになった時でしょうかね。最初は、その関西の講談の本、速記本といわれるような講談本、これを四代目の旭堂南陵師から見せていただく、そこから自分でも懐と相談しながらですがね、当時はまだ高かったですよ。美本だったら一冊が八千円とか

ね、七千円とか、今ではちょっと考えられないほど高値がついていた時代だったと思うんですがね。なのであんまり買うことができなかったわけですが、それを手に入れて読んでいく、そのうちに東京の、関東の吉沢さんのコレクションが本になっているというのを、やはり知るようになるんですね。そういたしますと、吉沢さんの中に網羅されている講談の本の多さですね、で、講談の本だけじゃないんですよ。雑誌と新聞というものにもう目を奪われましたね。講談の本だけをずーっと読んで、昔の方はこういう喋り方をしていたんだろうか、という想いを巡らせていたわけなんですが、きちっとした、というと語弊があるかもしれませんが、一席物になっているようなものが雑誌にはたくさん入れられている、新聞の連載も、本当に体裁よく一席物の連続みたいになって、面白い山場が毎度毎度作られている、そちらに心を奪われましてから、吉沢さんの著作が出るのを心待ちにするというような話になりましたね。

西田　はい、ありがとうございます。今ちょうどその横に置かれてるもの、はい、それを少しお手に取っていただいて、お話いただければと思うんですけれども。

南海　これは高橋先生からご紹介がありました、『講談作品事典』の上中下の三冊（画像①吉沢英明『講談作品事典』上）、もう一冊合わせて四冊になっているんでしょうけれど、これなどは一番役に立つといいますかね、これがなければなかなか講談の深いところまでは知ることができずに、そうですね、（高橋氏が画面で吉沢英明著『講談作品事典　続編』を見せる）今高橋先生が出してくださった『講談作品事典』のあれが四冊目になります。続編ということですね、はい。で、私は例えば講談のネタを、師匠からつけていただくのは、やはり分量、ジ



画像①吉沢英明『講談作品事典』上

ャンル、ネタ数が、膨大なものが講談にはありますので、師匠がたくさんネタを持っていらっしゃったとしましてもつけていただくのは全体の講談の何十分の一何百分の一にしか過ぎない、ということになるんですね。もっと他の講談を知りたいそれを口演したい時には、初めに申し上げましたように講談の速記本、これを目当てにするんですけど、闇雲に一冊取って「あ、これいける！」ということはありえないわけですよね。そういう時にこの作品事典は、あいうえお順の索引にもなっておりますので、梗概がついてますから、どういう話かなというのがよくわかるんですよ。それだけじゃないのが、深みという点になるんですが、例えば、『大塩平八郎』という話をやろうと。師匠（注：三代目旭堂南陵〔1917～2005〕）からは『大塩平八郎』の話はつけてもらわなかったんですよ。で、関東に一席物だけとして『瓢箪屋政談』があるんですね。これも去年お亡くなりになった八代目の貞山先生に、なぜ『瓢箪屋政談』が一席だけ東京にあるんですか、と。関西にも大塩平八郎ものは昔はあったと番付とかいろんな資料に出てはくるんですが、現在それをちゃんとやっているという人はいないんですか、というと貞山先生も、「俺もよくわからないんだ。親父が一席だけつけてくれて、親父もこの一席しか持ってないっていうんだよ」というお話だったんですよね。『瓢箪屋政談』を引いてみたらちゃんとここには出るわけですよ。この『瓢箪屋政談』は、どの話と似てるというところまでも出てくるわけなんですよね。これは延広先生などのご研究などにも出てきますから、わかるところなんですけれど、ちなみに例えばこれ（画像①吉沢英明『講談作品事典』上）で『大塩平八郎』を引きます。『大塩平八郎』を引きますとね、あの有名な『大塩平八郎』の速記本の粗書きみたいなものが始めに出てくるんですよ。で、これは何年の何月にどの出版社から、口演者が誰で速記者が誰で、という本のあらすじですよとちゃんと書いてくださってます。それだけじゃありません。この大塩平八郎に関連するものとして、作品事典の中にはこういうものを入れてますから見てくださいとまで入れてくださってるんですよ。例えば『大塩平八郎』のあらすじが終わったあとには、『瓢箪屋政談』、そして『義犬塚の由来』、『侠客般若坊』、『女行者豊田貢』、『献上煙草』、『言葉の助太刀』、こういうものがずーっと出てくるんです。例えば「えーっ、知らんのんばっか

りだ！」と思って、じゃあこの“義犬の塚”というのはなんだろう、と義犬塚をずっと探していくと、当然義犬塚が出てきますね。義犬塚を見ますと今度義犬塚の最後に、関連するものとしてはこれがあるからこれを見なさい、と。で、また見ていくんですよ。どんどんどんどん大塩平八郎という人物の名前一つとっただけで講談の広がりと深みがずーっと出てくるのが、吉沢さんのこの労作ということになるんでしょうね。

西田　はい、ありがとうございます。高橋さん、そのあたりも含めて、実際、南海さんの話を聞きながら（『講談作品事典』を）引いておられましたけれども、何かお聞きになったりコメントいただけるようなことありましたらお願いします。

高橋　まさに今、南海さんが言われたようなことをお聞きしたかったんです。今の講談師に非常に役に立つ本であるということがよくわかりました。南海さんは、吉沢さんの本はそんなに持っておられます？

南海　所持してるかどうかですか？

高橋　はい。

南海　そうですね、全部じゃありませんけれど、七割、八割ぐらいは持ってると思いますね。吉沢先生に直接、お手紙をお出ししまして、高橋先生が（一つ前のプログラム「吉沢英明氏の人と仕事」で）おっしゃったような鉛筆書きのお返事とともに、御本が送られてきまして、振り込みをするというのを何度もやりましたね。その中で、高橋先生がご紹介した著作の中で、もう一つこの作品事典とともに大いに役に立ってますのが、大正時代の雑誌目録ですね。

高橋　はい、ありますね。

南海　あれが実は例えば、国立の図書館などでもデジタル化はまだされてないはずなんですよ。で、講談の一席物に仕立て上げよう、本当は続き物なんでしょうけれど、手近なところで一席物にしたい時には、雑誌の中に入っている一席が、本当にコンパクトで一席物に仕立て上げられているもんですから、それをダイレクトに手にするほうがよほど早いんですよね。ただどこに何があるかがわからないという時に、吉沢さんのあの雑誌目録をずーっと見る、ところがその雑誌の現物が吉沢さんのところにしかないんですよ。どこへ行きゃこれ

の外題になっているのを見ることができるんだ、吉沢さんのところかぁ…というような話になってしまってるのが、今の現状でもあるんでしょうかね。

西田　ということは今回は、そういう雑誌なども含めて、全て公立大学に入ったということになるんでしょうか。そのあたり奥野さん、お願いします。

奥野　まだどの箱に雑誌が詰まっているかわからないですけど、講談関係の雑誌がたくさんあってそれは全部運びました。運び入れていますので、約六七〇箱の中を全部開ければどこかから出てくると思います。今、南海先生がおっしゃったことで、（画面に画像②を出して）これは吉沢コレクションからではないのですが、大正五年一月の博文館の『講談雑誌』です。今おっしゃったように、雑誌に載っている講談はこういう感じで、基本的に読み切り、でしょうか…？

南海　いや、そうでもないです。『講談雑誌』でしたら、続き物のものも、これはでも全部読み切りになってるかなぁ。続き物も中にはあります。

画像②『講談雑誌』（大正五年一月号　博文館）目次　奥野架蔵

奥野　はい。短いページ数でこういう感じで、悟道軒圓玉の『安政三組盃（お玉ヶ池事件）』があったので（注：吉沢コレクションに悟道軒圓玉の晩年の日記や、圓玉の師・二代目松林伯圓の最初期の講談本『安政三組盃』が含まれていることを、「吉沢コレクション受入れ報告」で報告したため）、目次だけスキャンしたのですが、お正月号だから読み切りなのかはわからないですけど、読み切りのものが多いんですよね。

南海　はい。

奥野　（圓玉のページを見せながら）こういう感じで、「圓玉宅手記」とありますけど、読み切れるようなものということです。今の講談師さんでも、師匠から習ってないものを新しく作ろうとした時にはこういうものがすごく役立つということですかね。

南海　そうですね。講談の速記本、特に関西で出版された速記本はいたずらに長いんですよね。だんだん講談は冊数が増えていくんでしょうけれども、意味なく長くしているという。亡くなったうちの師匠に伺ったことがあるんですけど、例えば一冊だけの貸本にするよりも、もう一冊で完結になりますよというほうが売れるわけですよね。なんならもうその次もいこう、だから“蟹江才蔵”というのがあったら、“後の蟹江才蔵”、“その後の蟹江才蔵”、“最後の蟹江才蔵”、たいがい四冊ぐらいになるんですけど、いるところだけぐっと縮めたら本当に三十ページぐらいで終わるというような話。これもたぶん研究者のお話になるんでしょうけども、じゃあ速記本とかこの雑誌に載ってる講談のネタが、本当にその演者が高座にかけていたものなのかどうか、あるいはその口調が、そのまま演者のものとして認めてよいのかどうかという問題もあろうかと思うんですよね。そういうものも全部鵜呑みにしてしまわずに、こちら側でちょっと疑心暗鬼になりながら考えていくということは、演者側からしても必要じゃないだろうかと思いますね。私の師匠などは、二代目の旭堂南陵という人だったんですが、師匠のお父さんがね。明治の十年生まれで、たくさんの速記本を出されました。で、新聞連載もたくさん出しました。その中で、うちの師匠、息子になりますが、その息子がうちの親父、二代目南陵の口ぶりを伝えていると評価してよいのは、『大阪新報』に連載した「豊臣秀吉」ぐらいちゃうか

ぁということをおっしゃってたことがあるんですね。これは明治の日露戦争のあとに、行友李風という新国劇の作者でもあった方ですが、あの方が肝煎りになって『大阪新報』で若手の旭堂南陵を抜擢して、「太閤記」を連載させるということになったんですね（注：吉沢英明『講談作品事典（中）』「太閤秀吉」の項 P1007 に「※南陵は明四〇年代の〈大阪新報〉〈函館毎日新聞〉等に「豊臣秀吉」を長期連載、又単行本として続々刊した」とある）。で、それが本になっているんですけど、国会にもたぶん全部は揃ってないとは思うんですがね。その口ぶりというのが新聞連載だけどうちの親父にこれはそっくりだと、太鼓判を押しておられました。逆にいえば、そのほかはじゃあどうなんだ、ということにも繋がりますからね。このあたりはなかなか悩ましいところではありますね。

西田　ありがとうございます。今おっしゃっていただいたようなことが、ぼくの最初の発表で申し上げたことで恐縮なんですけれども、まさに文献があって、そして研究者がいて、そしてそれに今実際にそんなふうにしてお話をされる演者の方がおられて、その感覚みたいなものが、逆に研究のほうに跳ね返っていくというか、そういう視点が出てくるのかなということを改めて感じました。高橋さん、何かそのあたりのことも含めてお聞きいただければと思います。

高橋　そうですね、今の話とは直接関わらないことなんですが、あの南海さんにね、古い、例えば今の雑誌（画像②）、『講談雑誌』なんかはたぶん全部一話読み切りなんじゃなかったかと思いますけど、それを使って今講談にする時に、結構苦労した話とか、逆にこれはうまくいったなぁとか、そういうのどうでしょう、あります？

南海　そうですね。

高橋　南海さんから借りた本に、「なんかこれだんだん面白くなくなるなぁ」とかいう付箋が貼ってあったような覚えもあるんですけど。（高橋追記：明治四二年（一九〇九）年）刊『豊臣秀頼琉球征伐』「冗長にすぎる　ちゞめよう」という付箋も有りました。）

南海　分量がありますので、増やした分がたぶんいらないところとみてよいかもしれないんですけれど、どこをとってどこを捨ててという、これはもう演

者の感覚になるんです。で、全部とっていくという時にこれは史実だからとりましょうという感覚に我々がなってしまうと、もう芸ではなくなる、物語ではなくなる可能性が多分にありますね。講釈師は、本当のように見せかけて実は大嘘なんですよというのが大前提のはずですので、本当のお話をいたしますと言って本当のお話だけやったところで、面白いこともなんともないと思うんですね。ですから、膨らませているところでも、これはひょっとしたら嘘には違いないけれども採用しようかな、というようなくだりをあえて入れていくという作業を私はやっております。昔の講釈師、あるいは速記者が入れ込んだかどうだかは知りませんけれど、入れた感覚を思いながらね、あぁ、これはなるほど、ここへこんな嘘を、わかりきったような嘘だけど、これをあえて放り込んでくるようなことをしてるのか。ならそれを、私も踏襲しましょう、というような話で、お話を作っていくのがわりと多いですね、僕は。それが成功するかしないかはまた別の話ですがね。

高橋　明治だと今にそのまま持ってくるのはかなり難しいんじゃないんですか。

南海　はい、明治の例えば二十年代ぐらいまでの速記の本でしたら、恐らくは演者の口ぶりをそのまま伝えているのがだいたいだろうといわれてるのかもしれませんけれど、そのままを今口演するのは、たぶん難しいだろうと思いますね。具体的に何がどう難しいかといわれても困るんですが、例えば先ほど奥野先生から見せていただいた『講談雑誌』は一席物になってました。正月特番だからかどうかわかりませんが、一席物ですよといいましても、あれを声に出してずっと読んでいくだけでも一席はたぶん四十分から五十分ぐらいかかるんですよ。これが口演にかかって最初にマクラのようなものを喋って仕草が入ると小一時間にたぶんなろうかと思うんですね。一席物なのにそれぐらい時間がかかってしまうということは、それ自体でもう昔の一席物と今の一席物というものの時間尺の違いが出てくるんですよね。そういうところがあろうかと思いますね。

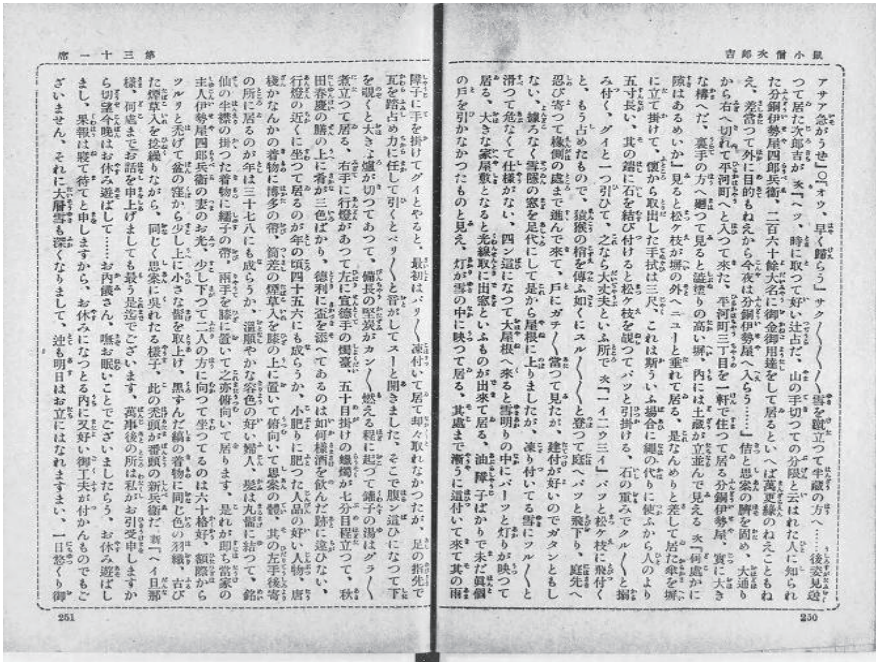
高橋　ありがとうございます。

西田　ありがとうございます。先ほどの発表で奥野さんが南海さんにお聞き

したいと言ってた描写のところがあるんですけど、もう一度改めておっしゃっていただければと思います。

奥野　はい、今の、嘘だからといって外したら逆にリアリティがなくなるというのは、そことすごく繋がることかなと思うんですが、先ほど私が（「吉沢コレクション受入れ報告」の）パワーポイントのほうで出させていただいた、芥川龍之介が小説家志望の学生に、「小説家になりたければ講釈を聞け」と言ったと（注：間宮茂輔「芥川龍之介断片」（「新日本文学」昭二五・七）参照）。さらに、小金井蘆洲の講談は「話が描写になつてゐるからね」という言い方をしたと。あの意味をずっとどういうことかなと考えていて、授業で学生さんに勝手に私の解釈を言ったことがあるんですけど。例えばなんですが、小金井蘆洲の大正になってからの『鼠小僧次郎吉』、芥川龍之介が「鼠小僧次郎吉」という小説を書く時にこれを参考書にしたというものなんですが、分銅伊勢屋に次郎吉が忍び込むというところで、そこの忍び込む時のこの戸の開け方だけで十行ぐらいとってるんですね（画像③を画面に出す）。

真ん中あたりの十行ぐらいなんですが、「庭先へ忍び寄つて縁側の処まで進んで来て、戸にガチガチ当つて見たが、建付が好いのでガタンともしない、拠ろなく雪隠の窓を足代にして是から屋根に上りましたが、凍り付いている雪にツルツルと滑つて危なくて仕様がない、四ン這になつて大屋根へ来ると雪明りの中にパーツと灯りが映つて居る、大きな家屋敷となると」云々とあって、「障子に手を掛けてグイとやると、最初はバリバリ凍付いて居て却々取れなかつたが、足の指先で瓦を踏占め力に任して引くとベリベリと音がしてスーと開きました」このあたりの戸を開けるだけで十数行とる、ものすごく本当に、凍てついた雪の夜に戸を開けようとしたら、確かにそうかもしれないなと、本当に見てきたような嘘をと、まさにそういう感じがして、芥川が言っている「話が描写になっている」とは、もしかしたらこういうことかなと、筋は全く関係ないところなんですけど、フィクションにリアリティを持たせるためにはやっぱりこういうところが大事なのかなというのを私なりに解釈してるんですが、プロの講談師さんからみて「話が描写になっている」というのはどういう感じだと思われますでしょうか。



鼠小僧次郎吉　250

アヤア忍さうせ」○「オヽ、早く歸らう」サク〳〵〳〵〳〵雪を蹴立つて半蔵の方へ……後姿見送つて居た次郎吉が、矣「ヘッ、時に取つて好い辻占だ、山の手切ての分限と云はれた人に知られた分銅秤惣屋四郎兵衛、二百六十餘大名に御御用達をして居るといへば萬更縁のねえこともねえ、差詰て外に目的もねえから今夜は分銅秤惣屋へ入らう……」信と思案の臍を固め、大通りから右へ切れて平河町へと入つて来た、平河町三丁目を一軒で住つて居る分銅秤惣屋、實に大きな構へだ、裏手の方へ廻つて見ると磯塀の高い塀、内には土蔵が立並んで見える、矣「何處かに隙はあるまいか」と見ると、松ケ枝が塀の外へニユーと垂れて居る、是なんめりと見て、是だ魔が塀に立て掛けて、復から取出した手拭は三尺、これは期ういふ場合に縄の代りに使ふから人のより五寸長い、其の端に石を結び付けると松ケ枝を越してバツと引掛ける、石の重みでクル〳〵と捲み付く、グイと一つ引ひて、之なら大丈夫といふ所で、矣「一イ二ウ三イ」バツと松ケ枝に飛付くと、もう古めたもので、猿猴の梢を傳ふ如くにスル〳〵〳〵と登つて庭へバツと飛下り、庭先へ忍び寄つて縁側の處まで進んで来て、戸にガチ〳〵當つて見たが、建付が好いのでガタンともしない、鎌ろなく雪隠の窓を足代にして是から屋根に上りましたが、凍り付いてる雪にツル〳〵と滑つて危くて仕様がない、四ン這になつて大屋根へ来ると雪明りの中にバツと灯りが映つて居る、大きな家屋敷となると瓦繰取に由家といふものが出来て居る、油障子ばかりで未だ銅鍋の戸を引かなかつたものと見え、灯が雪の中に映つて居る、其處まで漸うに這付いて来て其の雨障子に手を掛けてグイとやると、最初はバリ〳〵凍付いて居て却々取れなかつたが、足の指先で瓦を踏ん張り力に任して引くとバリ〳〵と音がしてスーと開きました、そこで眼の辺ひになつて下を覗くと大きな爐が切つてあつて、鍋長の鍋が カン〳〵燃える程に起つて鍋子の湯はグラ〳〵煮立つて居る、右手に行燈があつて左に寛永手の燭臺、五十目掛けの蠟燭が七分目程立つて、秋田春慶の膳の上に肴が三色ばかり、徳利に盃が添へてあるのは如何様酒を飲んだ跡に違ひない、行燈の近くに坐つて居るのが年の頃四十五六にも成らうか、小肥りに肥つた人品の好い人物、唐棧かなんかの着物に博多の帯、筒差の煙草入を腰の上に置いて思案の體、其の左手後寄仙の所に居るのが年は三十七八にも成らうか、温順やかな容色の好い婦人、髪は丸髷に結つて、銘仙の半襟の掛つた着物に繻子の帯、両手を膝に置いて之亦俯向いて居ります、是れが即ち當家の主人伊勢屋四郎兵衛の妻のお光、少し下つて二人の方に向つて坐つてるのは六十の格好、銀縁の眼鏡から覗いて、ツルツと禿げて盆の窪から少し上に小さな髷を取上げ、黒ずんだ縞の着物に同じ色の羽織、古びた煙草入を拵繰りながら、同じく思案に臭れる様子、此の禿頭が番頭の新兵衛だ 言「ヘイ旦那様、何ぞ他事でお話を申上げましても最う是迄でございます、蔦屋様後の所は私がお引受申しますから切望今晩はお休み遊ばしても……お内儀さん、嘸お眠いことでございましたらう、お休み遊ばしまし、果報は寝て待てと申しますから、お休みになつては如何でもございませんか、それに大層雪も深くなりまして、迚も明日はお立にはなれますまい、一日お慰くり御

251

画像③国立国会図書館デジタルコレクションより、博文館長篇講談第三十四編『鼠小僧次郎吉』(小金井蘆洲講演、加藤田太郎編　1918 年)P250・251

南海　まずあの落語は仕草、講釈は十分において描写ということはたぶん間違いはないだろうとは思うんですけれど、その〈長篇講談〉でしたっけ、『講談雑誌』ですか、『講談雑誌』の中…。

奥野　今出しているのは博文館の〈長篇講談〉という五百ページぐらいあるやつです。

南海　そうですよね。

奥野　いたずらに長くしたやつです。

南海　そうなんですよ、いたずらに長くしたやつで〈長篇講談〉は本当に五百ページぐらいな、厚さが三センチぐらいあるやつですよね。それはあえてそれぐらいまでの分量にしなくちゃならないので、ひょっとしたらいろんなものを増やしていった、そのうちの一つが、と言えないこともないんですよね。描

写というのは場面の描写というよりも、例えば道行の描写ですとか、東海道五十三次ずーっと美辞麗句並べていくですとか、それは平場修羅場というものに凝縮されるとは思うんですけれど、武将のいでたちを兜から足の先までぜーんぶ言葉で喋っていくのを描写というんですけどね。で、蘆洲というのはたぶんこれは四代目の蘆洲（奥野追記：ここでの『鼠小僧次郎吉』は三代目蘆洲でした。後の質疑でご指摘を受け確認しました）だと思うんですが、四代目の蘆洲は、私も定かじゃありませんが、早く喋る、人が喋ると十日かかるのを六日五日ぐらいで全部終わってしまうというぐらいの早読みの蘆洲といわれた人だったんじゃないかと思うんですよね。その早読みの人が、そこまで詳しく描写を、その描写というのは講談的な描写と、演者としてですよ、演者としてはそこまで戸を開ける描写をするような話はあんまり聞いたことがないんですね。普通講釈の描写は、やってくると“スッ”、まぁこんな手もいれない“スッ”、という話なんでしょうけれど、スッと戸が開いた、あるいはなかなか戸が開けづらかったんだがグッと力を入れるとなんとか戸が開き中を覗いてみると、というそういうものがたぶん描写だと思うんです。戸を開けるまでに時間を費やすということでいえば、例えば関西の講談の速記の本は、「頼もう」、「どうれ、どちらから」、「拙者、何々何々」、「あいわかったしばらくお待ち」というとその取り次ぎが次の奥へ入って「今、何々という方が旦那にお見えでございます」、「そうか、ちょっと待っておけ」その男がさらに奥へ行って「ご主人」、「うん、その者が来たか。ならばそう伝えておけ」、「はい、わかりました」とその順番をずーっと取り次ぎが二人三人出てまいりまして、訪ねてきた人が中へ入るまでに十行ぐらい文字を使うということは、速記本の中には当たり前のようにあるという、これは始めに申し上げましたように冊数を増やして顧客にお金を使わせるという、そういう手だったとこれも亡くなった師匠が言ってたんですけれどもね。ただその、ひょっとしたらその描写を蘆洲がやっていたのかもしれませんが。これは速記はどなたになってますか。

奥野　加藤…。

南海　由太郎。

奥野　はい。

南海　この蘆洲の鼠小僧の古い版とか、これの原版とか、元版はどこまで遡れるとかいうのはあるんですかね。

奥野　これも吉沢先生の本で探しましたら、博文館〈長篇講談〉の鼠小僧は新聞連載がありました（奥野追記：吉沢英明『講談大正編年史』P72）。

南海　それも明治ですか、大正ですよね？

奥野　大正だったと思います（奥野追記：博文館長篇講談の『鼠小僧次郎吉』は、「東京毎夕新聞」に大正 5 年 2 月 4 日～同年 9 月 18 日まで小金井蘆洲講演、加藤由太郎速記「和泉屋治郎吉」の題で連載された本文を元にしている。拙論「芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」　―講談本との関わりについて―」（「日本近代文学」第 73 集）より）。

南海　そうなりますと、ほんとに演者が喋ったのを速記者加藤由太郎が書いたのか、悟道軒圓玉のような方、これは高橋先生にお聞きするのが一番当たりよいかもしれませんよ。

奥野　はい。

西田　高橋さんいかがでしょうか、今の南海さんからの発言について。

高橋　今のところは確かに冗長な感じがしてますね、小金井蘆洲のは。あの、描写になってるというのは要するに情景描写とか、心情描写もできているということだろうと思いますね。普通講談は筋を語るのが主なんですけど、時には情景描写もちゃんとやる、短い言葉でその場の状況をぱーっと、聴衆、読者の頭に広げてみせる、そういう力を持っているという、そういうことだと思いますね。今だったら落語家でそういう人いますよね、一言でぱっとその日が暑い盛りだということがわかるというような、そういうことができる人いますけど、講談師もそうなんじゃないでしょうか、名人とかになると。

西田　ありがとうございます。

奥野　ありがとうございます。

西田　最初のところが押してしまったので、時間がなくなってしまったんですけれども、南海さんにいろいろお聞きするという時間も大事なんですけれども、実際にやはり講談をお聞かせいただきたいということがありますので、そろそろ、座談会は終わりにしたいと思います。さっきから何度も出てますよう

に吉沢コレクションはこれから研究が始まっていくところでございますので、またこういう機会を何度も持つことができればと思っています。それこそ続編、続々編というような形で、やっていければと思いますので、今日のところは南海さんにお聞きするという会はこれで終わらせていただこうと思います。どうも南海さん、ありがとうございました。

南海　ありがとうございます。

講演者紹介　**旭堂 南海（きょくどう なんかい）**

昭和 39 年　兵庫県加古川市生まれ

平成元年 2 月　故三代目旭堂南陵に入門

同年 3 月　大阪大学文学部(国文学専攻)卒業

平成 8 年　　「咲くやこの花賞(大衆芸能部門)」受賞

平成 21 年から「加古川観光大使」を務める

なみはや講談協会副会長

CD『太閤記(木下藤吉郎編)』(全 40 巻)、『太閤記(羽柴筑前守編)』(全 36 巻)、『難波(なんば)戦記(せんき)』(全 40 巻)を発売。

侠客伝『祐天吉松』(全 16 話)、『浪花(なにわ)五人男(ごにんおとこ)』(全 8 話)等を YouTube(無料)にて公開。

その他、地域の民話・伝説の講談、偉人伝、『太閤記』『関ケ原軍記』『難波戦記』『大塩平八郎』『浪花(なにわ)侠客伝(きょうかくでん)』『浪花五人男』『関取(せきとり)千両(せんりょう)幟(のぼり)』など多数。

第 5 章

大阪市立大学恒藤恭旧蔵資料と明治期島根県明星派歌人とのかかわりについて

奥野 久美子

1　はじめに：恒藤記念室について

恒藤恭（1888～1967、旧姓：井川）は、大阪市立大学初代学長（学長在任1949~1957）であり、近代史では滝川事件で京大を辞職した法学者の一人として、また文学史では芥川龍之介の親友として知られる。

恒藤記念室は、恒藤学長が 1966 年、文化功労者として表彰されたことの記念として開室が準備され、1971 年に開室された。1996 年、大阪市立大学学術情報総合センターの完成にともない、同センター6 階の現在の位置に移転した。恒藤家から数次にわたり寄贈・寄託を受けた資料を基本に、その他の個人・組織などからの寄贈、および記念室の独自収集による資料もあわせ、約 4,000 点の資料がある。

これら資料の目録は『大阪市立大学恒藤記念室所蔵資料目録（増補改訂版）』（恒藤記念室叢書 5、2015 年、以下『目録』）として刊行されている。

恒藤記念室には、恒藤学長の中学時代から晩年に及ぶ膨大な身辺資料が残されているが、研究活用は芥川龍之介、滝川事件関連などの一部資料にとどまっている。当然ながら学内では大学づくりに関わる資料群が積極的に研究されているものの、総じて芥川に出会う前の少年時代の資料は、伝記研究以外にはほとんど研究対象とされていない。わずかな例を除いて、文学研究の素材や対象にもされてこなかった。

本稿は、恒藤恭（以下、旧姓の井川時代も含めるため「恭」と記す）が少年時代を過ごし、文学を志して詩歌を創作・投稿していた松江時代の資料（明治

後期の地元紙短歌投稿欄のスクラップ、歌稿が記された日記等）から、明治後期の島根歌壇、中でも明星派歌人との関わりをひもとく試みである。

２　恒藤恭の松江時代資料について：これまでの研究と課題

松江時代の資料の内容は、のちの法哲学者恒藤恭の、人格形成期にあたる思春期の日記と、詩歌・俳句・随筆・美文などの創作が掲載された新聞・雑誌のスクラップノート、それに水彩画のスケッチブック等である。それらの資料から、恒藤の思想形成や人格形成を読み取る試みは、これまでにもいくつかなされてきた。

夙に山崎時彦氏（大阪市立大学名誉教授・政治思想史・法学者）は編著『若き日の恒藤恭』（世界思想社 1972 年 1 月、増補改訂・改題版『恒藤恭の青年時代』未來社 2003 年 10 月刊）において、恒藤恭の少年時代の俳句・短歌・新体詩・随筆や小説を、現在は恒藤記念室に収められているスクラップ（編著の当時は、恒藤家からお借りして確認されたとのこと）や掲載誌から拾い、抜粋して掲載している。なおかつ、山崎氏は第二部の評伝の冒頭において、「中学卒業後、約三年間の静養を強いられ、文学研究からの目標転換という試練も味わい、しかもやがて法哲学界の第一人者となり、他方強靭で寡黙、温和な人柄によって敬慕の対象となるに至った」とし、療養時代は「彼の人間形成に大きい影を落とした」とする（増補改訂版『恒藤恭の青年時代』第二部第一章）。その療養時代の明治 40 年に恭は特にさかんに詩歌を詠み、日記に書きつけ、投稿もしている。療養時代の思索とその発現としての創作は、密接に結びついている。

増補改訂版『恒藤恭の青年時代』の解説で廣川禎秀氏は、山崎氏の恒藤研究を「これまで法学者の側から恒藤法哲学に関する研究がなされてきたが、著者（稿者注・山崎氏）はそれとは異なる広い思想史的観点から新しい恒藤研究の第一歩を踏み出したといえよう。」と評価する。

この山崎氏の編著に収録されている恭の詩歌を、ドイツ文学者の視点および郷土文学の観点からより詳しく分析したのが、佐野晴夫氏（山口大学名誉教授・

ドイツ文学者）であり、氏は論文「生田春月と山陰の詩壇（２）」（「山口大学教養部紀要　人文科学編」第19巻1985年2月）において、「恭の所属した文学結社である白虹青戸博幸主宰の二葉会、葉桜松原正光主宰の紫菫会」にも触れつつ、白虹編の『落穂集』（明治36年3月刊）に収録された恭の短歌の歌風を、白虹とは異なる歌風だと分析している。しかし、自身の作品が初めて活字になったと思われる『落穂集』について、恭は明治36年の日記では一言も触れていない。この年の日記に書かれる創作は俳句のみで、短歌や詩の投稿は明治37年秋ごろから始まるため、この時期はまだ、家族に読まれることが前提の日記に、短歌の創作について記載することを避けたのだろうか。白虹と恭とのかかわりについては後述する。

この論でさらに注目すべきは、少年期の創作とのちの法哲学者恒藤恭の思想信条とを結びつけている点で、たとえば滝川事件での恒藤について触れる中で「高き理想をかかげ、社会正義を求めてやまない彼の信条は、すでに18歳のときの詩に平明な表現で刻印されている」として、明治40年「ハガキ文学」に投稿、10月に掲載された詩「時代の反映」をその証左としたうえで、この詩は選者児玉花外の『社会主義詩集』（明治36年8月刊、ただし発禁のため恭が手にすることはなかっただろう。収載詩を初出で読む機会はあったかもしれない）との関係を示唆しつつ、「昭和前史の悲劇性を予言する詩篇として解釈することも可能であろう」とする。文学作品研究としてはやや飛躍があるものの、労働者が「富者の生命を呪ふては　社会の破滅をよぶこゑ」に、「宰相」「学者」がいくら頭を悩ましても謎は解けない、とうたうこの詩に、10代の恭の社会正義への真直ぐな思いや、思想形成の一端を見ることは妥当であろう。2年半後の明治43年2月に、東京府立第三中学校に在学中だった芥川龍之介が木曾義仲を「革命の健児」と称賛した「義仲論」を「学友会雑誌」に掲載したことと、比較することもできるだろう。

ただ、山崎氏の著書や佐野氏の論でも詳しく分析されていないものの一つに、松江時代の日記に見られる読書歴や講演の聴講がある。明治36年6月9日には、朝鮮の政治家で親日開化派の朴泳孝が、また9月30日には後の一高校長新渡戸稲造（当時の肩書は台湾総督府殖産局長心得）が来校、それぞれ講演を

聴いている。またこの頃は紀行文を好んで読み、久保天随『紀行文集／檜木笠』や、巌谷小波著『洋行土産』（ベルリンの滞在記）を読んだとある。この年明治36 年には、義兄の佐藤運平が洋行したこともあり、紀行文で欧州に思いをはせていた面もあるだろう。兄の影響での熱心な英語の学習とあわせて、教養だけではない欧州への関心の萌芽も見られる。

日記も用いて恭の少年期の思想形成を考察した研究としては、思想史研究では廣川禎秀氏の『恒藤恭の思想史的研究』（大月書店 2004 年）〔第一章「世界観の形成」で日記を引用分析〕、文学研究では関口安義氏の『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部 2002 年）がある。いずれも日記から記事の一部を紹介しつつ、その他膨大な資料ともあわせて恭の人格・思想形成を分析している。

また、恭の少年時代の創作を文学研究の方法で分析した研究には、村田正博氏の「恒藤恭の文学的側面を考えるために：切抜帳（其一）注解覚書「古戦場」」（「大阪市立大学史紀要」第 6 号 2013 年 10 月）がある。

日露戦争が始まる明治 37 年の日記から、15〜16 歳の恭の、戦争に対する思いや冷静な状況把握が読み取れることは、拙論「恒藤恭、芥川龍之介の日露戦争：トルストイの読書体験とあわせて」（「大阪市立大学史紀要」第 7 号、2014 年 10 月）で触れたことがある。

しかし、恭の詩歌創作のうち、短歌を対象とした研究も、当時の明星派歌人たちとの関わりについて調査分析した研究もこれまでなされていない。恭の松江時代の短歌活動については、恒藤恭研究と、島根県近代短歌研究との両面において、新たな展開が期待できると考え、次節よりその一端を紹介していく。

3　〈井川日記〉記載の詩歌関係記事から見える恭の創作活動：島根県明星派歌壇とのかかわり

前節で触れた『恒藤恭とその時代』において、関口安義氏が〈井川日記〉と総称する恭の少年時代の日記のうち、主に松江時代のものは、明治 36・37・40 年分が恒藤記念室に現存する。明治 36 年日記については、稿者が宍倉忠臣

氏や大阪市立大学の院生と共同で翻刻・注釈を施し「恒藤恭 ： 島根県立第一中学校時代の日記（「井川日記」）： 明治三十六年分 ： 翻刻と注釈」（「大阪市立大学史紀要」第 12 号（2019 年 10 月））として発表済みである。

まず、その明治 36 年の日記から詩歌の実作や詩歌に関する記載を拾ってみる。以下箇条書きをまじえつつ示す。

【明治 36 年日記】

・1 月 26 日 :『俳句初歩』を買い、その日のうちに読んだとある。河東碧梧桐著『俳句初歩（俳句新叢第三編）』（新聲社　明治三五・一二）のことであろう。前月に出版されたばかりの俳句指南書をさっそく入手したわけである。

・2 月 3 日 : この日は亡くなった祖母の五十日祭で、恭ら孫がみな短冊に歌や俳句を詠み、祖母をしのんだ。短歌を詠むきょうだいもいたが、恭は俳句を詠んだ。きょうだいの句とともに掲げる。（引用の際、旧字は新字に改める。以下同）

今更におはせし昔しのばれておがむ絵姿おぼろにぞ見ゆ（繁）

又更に袖ぬらすなり祖母君のおもかげしのぶみたままつりに（姉）

かほりたかき紅梅しらうめ折りそへてけふうるはしきみたままへらむ（清）

かくり世のおほがみあはれみたまへ／めぐみたまへ幸きみたま／くしみたままもりたまへさきはひたまへと申す（亮）

恩如海（貞）

白うめにけふ思ひでの多き哉（恭）

・2 月 23 日から、それまで英単語を書いていた「日課」欄に、俳句を書き始める。

23 日　春の夜や召し出されし琵琶法師

24 日　菜の花や笠すてゝある田圃道

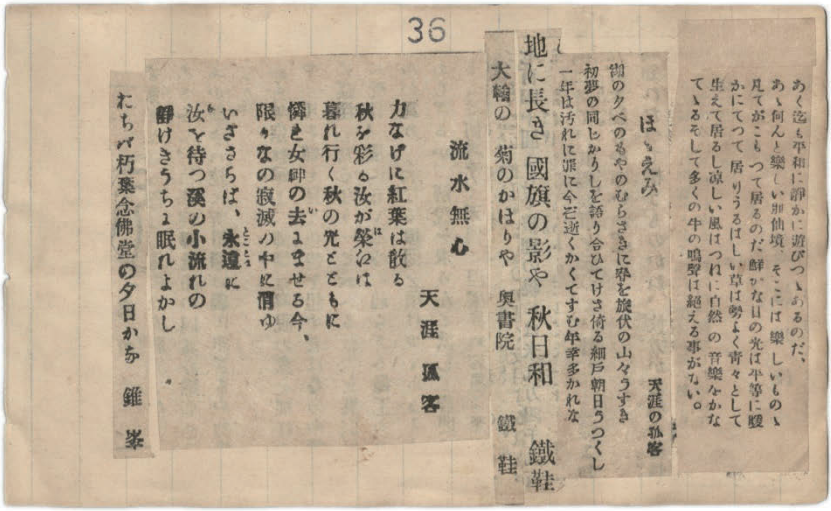
などの句を作っている。

・2 月 27 日からは一日二句ずつ 3 月 20 日まで毎日俳句を書き、そのあとは 3 月 30 日の宵節句の句「子供らは雛の前にて馳走哉」のあと、半年余りは俳句も他の詩歌も記載されていない。

・10 月 23 日 :「不正マラリア」でしばらく病床に就き、

23 日　秋の日を病にやせし我身哉

24 日　地に長き国旗の影や秋日和（稿者注：この句は『目録』所載「Ⅷスクラップブック」「(14) 詩歌・俳句スクラップ（1904 - 1905 頃)」P36 に、「鉄鞋」の筆名で掲載された切り抜きが貼られている。掲載紙誌不明、画像①。）の句を作っている。



画像①「Ⅷ（14）詩歌・俳句スクラップ（1904 - 1905 頃)」P36

大阪市立大学恒藤記念室蔵

以上が明治 36 年日記の詩歌に関する記載で、すべて俳句であり、指南書を買って読んでいることからも、この年は俳句への関心を高めていたことがうかがえる。

【明治 37 年日記】

・3 月 14 日ごろから、「得たる思想」欄に、散文詩か美文ともいえる文章を綴っている。この年の日記には、日記帳に一日ごとに「往来」「為したる事」「得たる思想」「社会の出来事」「雑事」の各欄があらかじめ設定されており、そのうちの「得たる思想」欄に創作的な文章を綴っている。たとえば 3 月 19 日は以下のとおり（一字アケは引用者による、以下同)。

星よ夕べの星よ　うすぐらう紺に化しゆく空に一つきらめく小さき星を一人ながめて立つ時　愁はある一種の霊妙の力にうたれしごとく　我身已にかの星の中の都のうちにあるごときこゝちす

・10 月 26 日「得たる思想」欄

われは天地の一つの霊なり　我はわれのため生れたり　人のそしりはいかにもあれ　われは天地の子なり天地のうちにわが領は見いでぬべし　もしあたはずば雲のうちにわが家あらむ

そして 37 年日記で最も注目すべきは以下の記載である。

・11 月 4 日：朝 銀鈴きたる。

この「銀鈴」とは、島根県の「明星」系歌人、河野翠瀲が主宰した文芸誌で、明治 37 年 4 月創刊、同 42 年 2 月に第 36 号をもって終刊した。明石利代氏著『「明星」の地方歌人考』（笠間書院 1979 年）の「Ⅱ　出雲・石見地方の短歌運動の担い手」の章内 P51 には、「三十七年の島根県の短歌会では九月二十日付で「銀鈴」が創刊された。」とある。そして主催者河野翠瀲は「島根県の短歌界では絶対に逸することの出来ない」（P53）「明星」系歌人であるとも書かれている。

「銀鈴」全冊を含む、河野翠瀲関連資料は、島根県立島根女子短期大学名誉教授の寺本喜徳氏が、一九九〇年代に河野家から寄贈を受け、整理されて、島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館に「山陰明星歌人資料」の一部として収蔵されている（寺本氏「河野翠瀲」島根県文学館推進協議会編『人物しまね文学館』山陰中央新報社 2010 年　所収）。また収蔵後、福田喜代美「河野翠瀲編「銀鈴」総目次」（「島根国語国文」1998 年）などの基礎調査がなされているが、その後の研究活用は充分にはなされてこなかった。

2021 年度より、島根県立大学の山村桃子氏と奥野が共同研究の準備をし、山村氏と同大教授の岩田英作氏が、寺本喜徳氏の協力を得て資料のデジタル化・データベース作成にとりかかっている。その成果は、2021 年秋に同大図書館ホームページで「銀鈴」全号をデジタル公開するという形で、早くも形に

なっている。

左：画像②「銀鈴」第弐号　　右：画像③「銀鈴」第参号

いずれも島根県立大学松江キャンパス図書館 HP にて公開の画像より転載

そのデジタル公開画像から転載した画像②は、明治 37 年 11 月 3 日発行の第 2 号の表紙である。恭が同年 11 月 4 日の日記に「朝 銀鈴きたる」と書いているのは、この第 2 号のことであろう。

関口安義氏『恒藤恭とその時代』（先掲）所載の恒藤恭著作目録により、「銀鈴」に恭少年の短歌等が掲載されていることは夙に明らかにされていたとおりで、「銀鈴」の第 3 号（画像③、明治 38 年 1 月）には、「天涯の孤客」の筆名で恭も長詩「年の訪れ」と短歌三首を投稿している。短歌三首は以下である。

花被（かつ）ぎ野に金星をふしめ見て夢とも座（ま）せり春の花王（はなぎみ）

ひとつ野に春を生ひたるゑにしなり天へのともぞむらさきの蝶

かうやうの思ひは深く胸に秘め夕日に小笠（をがさ）かたむけて行け

しかし、「銀鈴」に恭よりもさかんに短歌や新体詩を寄せていたのが、恭のいとこ、増野三良である。三良は、恭の母ミヨの姉うたと増野護信夫妻の三男で、浜田に住んでいた。恭が生まれた翌月、明治22年1月生まれである。島根県立第二中学校（浜田中学）から早稲田の英文科に進み、大阪毎日新聞社に入社。詩人、翻訳家として活躍したが、27歳で病没した。

先掲の佐野晴夫氏「生田春月と山陰の詩壇（2）」によれば、三良は河野翠瀲の銀鈴社設立とともに社員となり、後には編輯にも参画したという。実際に島根県立大学山陰明星歌人資料に含まれている「銀鈴」社友名簿（画像は非公開）の明治39年分などに、三良の名前がある。

岩町功「増野三郎」（『続・人物しまね文学館』山陰中央新報社2012年5月）には、「〔三良は〕県立第二中学校〔現浜田高校〕時代に、現邑南町の翠瀲河野岩雄主宰の文芸誌「銀鈴」に増野翅白（しはく）の雅号を用い、与謝野鉄幹の影響を受けた浪漫主義的な作風で、浜田の海をモチーフにした短歌や新体詩を寄稿している。」とあり、岩町氏の「夭折の詩人「増野三良」小伝（上）」（「郷土石見」2010年8月）には、より詳しく「銀鈴」と三良の掲載歌について紹介されている。

恭はこのころ、いとこであり文学仲間である増野三良と競うように短歌や詩作に励み、二人とも短歌では「明星」系地元歌人である河野翠瀲の影響下にあったと言えるだろう。

明治37年日記をさらに見ていくと、「銀鈴」を入手した11月4日以降、にわかに詩歌に関する記載が増える。

・11月6日「為したる事」欄

午前「僧正と詩人」をつくる（稿者注：新体詩か？当該作品については未詳）

午后　うたを思ふ

・同日「得たる思想」欄

ひとりしづかにうた想ふとき　われまことにたのし　ひとたび神のみすそをとらへたらむには　うちつゞきていづ　ふと心のやみにかげうしなへば　またあはむことかたし

・11月26日「得たる思想」欄に短歌三首

金色の神のみぐしをけづらむと櫛もてまゐるはるの夕風

花の宮にけふをみゆきの姫君のおんなやさしやあさづゆの君

この想（おもひ）とはに秘めむとくだりきて胸にひそむか悩みとふもの

創作した短歌は、投稿もしていたようで、

・12 月 1 日　夜うたを案ず

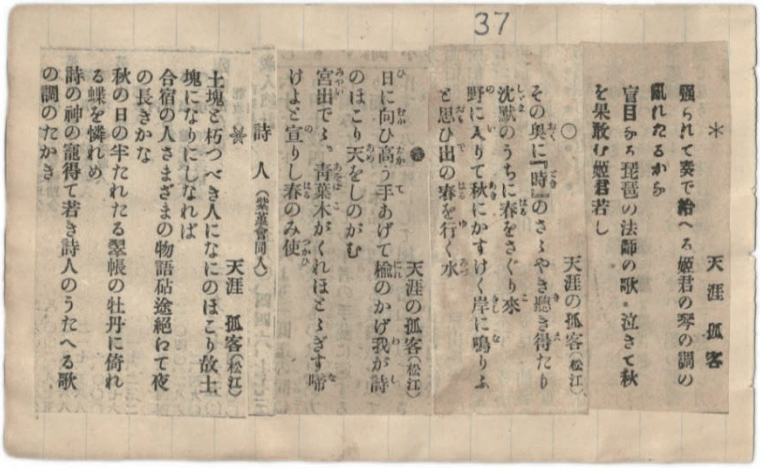
・12 月 2 日　夜うたを案じ絵をかきなどす

・12 月 8 日　朝青戸白虹氏へのふた葉会詠草をかきていだしたり

・12 月 9 日　朝 松陽新報応募軍事雑詠をつくりて出す

といった記載がある。

恒藤記念室所蔵の、推定明治 37～38 年ごろの短歌俳句スクラップブック「(14) 詩歌・俳句スクラップ（1904 - 1905 頃）」（分類番号とタイトルは『目録』による）にも、「天涯の孤客」の筆名で、新聞（年月日および原紙不明だが、「松陽新報」か）の「二葉会詠草」（「ふたば会詠草」などとも表記）欄に掲載された短歌のスクラップがある（P38～46）。また P37 には、「天涯孤客」の筆名、「詩人（紫菫会同人）」の見出しで、短歌八首が掲載されている（画像④⑤）。


37

＊　天涯孤客

弾られて奏で給へる姫君の琴の調の
亂れたるかな
盲目なる琵琶の法師の歌・泣きて秋
を果敢ひ姫君若し

天涯の孤客（松江）

○
その奥に『時』のさゝやき聽き待たり
沈黙のうちに春をさぐり來
野に入りて秋にかすけく岸に鳴りふ
と思ひ出の春を行く水

天涯の孤客（松江）

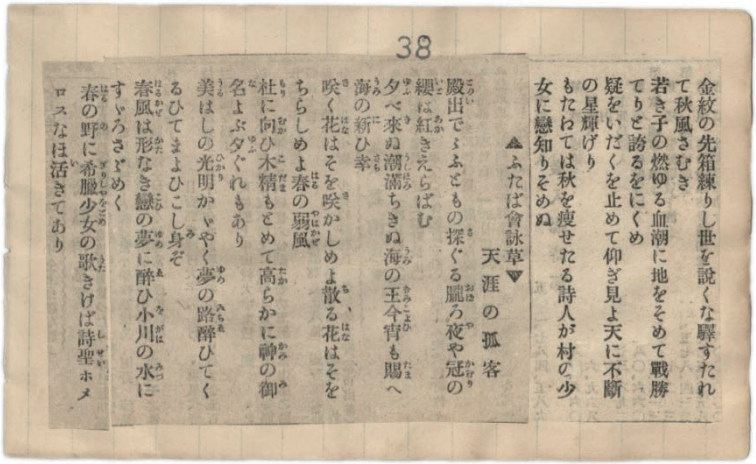
日に向ひ高う手あげて楡のかげ我が詩
のほこり天をしのがむ
宮出でゝ、青葉木がくれほとゝぎす啼
けよと宣りし春のみ使

詩人（紫菫會同人）

黄　天涯孤客（松江）

土塊と朽つべき人になにのほこり故士
塊になりにしなれば
合宿の人さまざまの物語砧途絶ねて夜
の長きかな
秋の日の半たれたる翠帳の牡丹に倚れ
る蝶を憐れめ
詩の神の寵得て若き詩人のうたへる歌
の調のたかき

画像④「Ⅷ（14）詩歌・俳句スクラップ（1904-1905 頃）」P37　大阪市立大学恒藤記念室蔵



38

金紋の先箱練りし世を說くな驛すたれて秋風さむき
若き子の燃ゆる血潮に地をそめて戰勝てりと誇るをにくめ
疑をいだくを止めて仰ぎ見よ天に不斷の星輝げり
もたねては秋を痩せたる詩人が村の少女に戀知りそめぬ

▲ふたば會詠草▼

天涯の孤客

殿出でゝふたともの探ぐる臘ろ夜や冠の
纓は紅きえらばむ
夕べ來ぬ潮滿ちきぬ海の王今宵も賜へ
海の新ひ幸
咲く花はそを咲かしめよ散る花はそを
ちらしめよ春の弱風
社に向ひ木精もとめて高らかに神の御
名よぶ夕ぐれもあり
美はしの光明かゞやく夢の路辟ひてく
るひてまよひこし身ぞ
春風は形なき鯀の夢に醉ひ小川の水に
すゞろさゞめく
春の野に希臘少女の歌きけば詩聖ホメ
ロスなほ活きてあり

画像⑤「Ⅷ(14)詩歌・俳句スクラップ(1904-1905 頃)」P38 大阪市立大学恒藤記念室蔵

12 月 8 日に言及の青戸白虹の「二葉会」は、やはり島根の明星系短歌会であったらしく、「銀鈴」第 3 号の「編輯余言」には、「『しのゝめ会』『二葉会』『紫菫会』の諸子が研鑽の実を挙げられ候事をよろこび候」とあり、「銀鈴」誌上でたびたび見られる短歌会である。

明石利代氏の先掲『「明星」の地方歌人考』によれば、青戸白虹は明治 12 年松江市生まれ、旧制松江中学中退後、東京専門学校（早稲田大学）に学ぶ。病のため明治 35，36 年ごろは帰省し、地元で短歌活動を展開。「二葉会」はこの白虹主宰の会であると言及されている（Ⅱ章のうち「青戸白虹」の項)。

また寺本喜徳氏「原 石鼎」(島根県文学館推進協議会編『人物しまね文学館』先掲）や寺本氏『山陰文芸襍記』(1999 年　島根県立島根女子短期大学国語国文学会）P 56 にも「二葉会」への言及があり、それらによれば、島根県簸川郡の郡立簸川中学（県立第三中学）の英語助教諭であった青戸博幸（白虹）が在職中に結成した文学結社で、白虹は文芸同人誌『ミチシホ』を発行して山陰の文学愛好者の拠点づくりを図ったという。

さらに「紫菫会」についても、明石氏の『「明星」の地方歌人考』P52 によれば、「二葉会同人として白虹を援けた重要な一人」で「「明星」にかなり長く投

稿している」松原葉桜という歌人が主宰した短歌会であった旨があり、前節でも引用したとおり、佐野晴夫氏は先掲「生田春月と山陰の詩壇（２）」において、「恭の所属した文学結社である白虹青戸博幸主宰の二葉会、葉桜松原正光主宰の紫菫会」に言及しつつ、恭の詩歌を分析し、後の思想形成へのつながりも示唆している。

白虹と恭とのかかわりは、明治 37 年日記では

・12 月 19 日　青戸白虹君より端書至る

ともある。また前節でも触れたが、明治 36 年 3 月 31 日（奥付）刊青戸白虹編『落穂集』に恭の短歌が六首収載されているが、明治 36 年井川日記にはそれに関連した記述が一切ない。なお、『落穂集』は早稲田大学図書館より全ページの画像が公開されているが、その表紙を見ると「明星」の影響が一目瞭然である。

明治 37 年日記をさらに見ていくと、

・12 月 21 日　古人は歌はよろづの興にふれてよみいでしものなりといへど我はしからず　想をこらして神をおもひ天をおもひあるは想を野のはな〔「はな」の部分は解読困難により推定。「はな」は「さき」とも〕にはせてぞ　うたは胸にわきしなる

・12 月 22 日　午前うたを想ふ。午后青戸白虹氏への詠草をかきていだす。

と、歌の創作に熱心な様子がうかがわれる。しかし、

・12 月 27 日　うたは当分やめざるべからず。余が脳髄は哲学的ならざる可らず〔「哲学的」の部分は解読困難により推定。「？学物あらざる可らず」とも〕。

と、27 日に突然、歌への決別が記される。父や兄からの何らかの苦言があったのかもしれない。

残念ながら明治 38・39 年の日記は現存せず、次の日記は明治 40 年分になる。上記からだけでも、恭が増野三良とともに島根の明星系短歌会やその歌人たちと直接間接にかかわりながら、詩歌の創作に熱中していた様子がわかるが、実際に恭の歌にも「明星」に掲載された短歌と類似した特徴的なものがある。明治 40 年 1 月 27 日の日記に書かれた以下のような恭の短歌である。

その世まで忘れ給ふな霊の二つ見えぬ糸にもむすばれにきと
霊ふたつ翅となりて夢の野をまよひありきぬ胡蝶のやうに

この「霊ふたつ」という表現には、あまり用例が見つからないのだが、「明星」に掲載された短歌には、近接した時期に二首の用例が見つかった。

「金獅」(「明星」明治 37 年 2 月号より)
安東竹山林(京都)
霊ふたつおのおの小さき彩羽(あやは)蝶(てふ)たはるるがごと花におりきぬ

「うたた寝」(「明星」明治 37 年 4 月号より)
小林吟月(出雲)
相抱きこゝに香ひの霊ふたつ行けば行くまま地は花となる
(稿者注:小林吟月は青戸白虹編『落穂集』にも収載の地元明星派歌人)

特に前歌に、「胡蝶のやうに」という恭の歌は類似しており、「明星」や「明星」系短歌会の影響が、投稿先の「二葉会詠草」だけでなく、日記掲載の短歌習作からもうかがえる。恭が実際に「明星」を読んでいたことも、明治 40 年日記の以下の記事でわかる。

・2 月 23 日　三良君より(明星未年二号)(稿者注:「明星」明治 40 年 2 月 1 日発行号)
・2 月 24 日　炬燵にあたつて明星をよむ。鐵幹の文藝評論「賤機」や文界消息がよまれる。其短歌の思想及び形式に対する研究の真面目な態度はわが心に警聲をあたへた。

このように、三良から借りた「明星」の最新号を熱心に読んでいる。なお、3 月 7 日の「発信」欄に「発―三良君　明星二号」とあり、読み終わった「明星」は郵送で三良へ返却したようである。

以上のように本稿で見てきた日記記事やスクラップ等の恒藤記念室資料から、松江時代の恭が増野三良とともに、島根の明星系短歌会に属し、その中心となった歌人たちとも直接間接にかかわり、自らの創作にも「明星」の影響を受けていた様子が確認できた。

４　おわりに：本研究の今後の発展について

これまで研究されてこなかった、恒藤恭の松江時代の資料と山陰明星派歌人たちとの関わりの一端を、上記で述べた。中で触れたように、恭は自身の投稿が新聞や雑誌に掲載された際には、その多くをスクラップブックに収集していた。『目録』では、少年時代の 1904 年ごろから晩年まで、実に合計約 1700 点余りの記事がスクラップされている。自身の著作だけでなく、気になった記事や、妻や子供たちのためと思われるスクラップもあるが、特に松江時代の詩歌および随筆、小説類のスクラップは、文学研究の上でも価値が高い。新聞の原紙やマイクロフィルムが現存せず、残っているのはこのスクラップだけ、という場合があるためである。

明石利代氏は先掲『「明星」の地方歌人考』P41 で、「明治三十四、五、六年頃の「松陽新報」を見ることのできない現在、白虹等によって展開された運動は、『落穂集』〔原注略す〕から探るより方法はない。」と述べている。島根県立図書館郷土資料室でも、「松陽新報」の本紙およびマイクロフィルムの所蔵状況として「M 34.11～M 43. 1 は欠号多数」と表示されており、実際に利用を試みても、この間の「松陽新報」は多くが欠号である。国立国会図書館にも明治 43 年からしか所蔵がない。しかし、恭は少なくとも自分の作歌が掲載された箇所だけはスクラップしている。つまり、欠号多数で調査できない「松陽新報」の短歌掲載欄を、少なくとも一部は恒藤資料で補うことができるのである。

恒藤資料と、島根県立大が所蔵する〈山陰明星歌人資料〉を用いて今後本格的に研究をすすめれば、近代島根県歌壇の世代交代の様相や、「明星」を中心とする中央歌壇と地方歌壇の関係が新たに見えてくる可能性がある。

※本稿は 2021 年 12 月 1 日　大阪府立大学 貴重図書特別部会講演会「大阪府立大学・大阪市立大学の貴重書」における口頭発表「大阪市立大学恒藤恭旧蔵資料の紹介―芥川龍之介との交友、島根県明星派歌人とのかかわりなど―」の内容に加筆修正したものです。ご意見ご教示を賜りましたみなさまへ御礼を申し上げます。

先端的都市研究拠点「共同利用・共同研究拠点」事業について

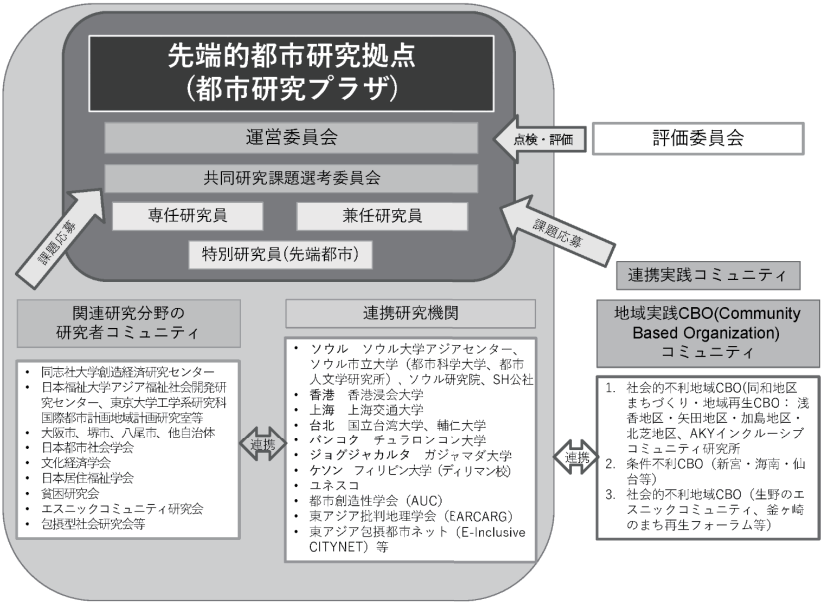
共同利用・共同研究拠点事業は、大学等から研究者が集まり、共同利用・共同研究を行う「全国共同利用」のシステムです。2021 年度に文部科学省に拠点として認定されていた研究機関は、国立大学 67、公立大学 10、私立大学 17、ネットワーク 6 の合計 100 箇所に及びます。

大阪市立大学は、建学の精神「大学は都市とともにあり、都市は大学とともにある」を受け継ぎ、「都市を学問創造の場としてとらえ、都市の諸問題に英知を結集して正面から取り組み、教育及び研究の成果を都市と市民に還元し、地域社会及び国際社会の発展に寄与してきました。市民のみなさんとともに、都市の文化、経済、産業、医療などの諸機能の向上を図り、真の豊かさの実現をめざす」ことを理念に掲げ、都市や地域の研究に対する総合的かつ学際的な都市研究の領域を領導してきました。教育の基本方針も「都市・大阪を背景とした市民の大学という理念に立脚」するとしています。

本学の建学精神を基礎とする都市研究プラザ（以下、URP）は、グローバル COE「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」（2007 年度～2011 年度）を推進し、独自に築いた海外センター・海外オフィスを始めとする国際的な研究者コミュニティのネットワークとの協力の下、文化創造と社会的包摂、アートによる災害復興等、学際的かつ広範囲の分野に渡る研究実績を重ねてきました。これまでの国際的な地域連携型学知と実践知のプラットフォームによる研究活動の蓄積によって育まれた、国内外の包摂型現場ネットワーク、幅広い域外・越境ネットワークの活用による共同研究活動を最大限活かすべく、2014 年度により「共同利用・共同研究拠点」として認定されています。

本事業では、これまで蓄積してきた研究や学術資源を、さらに地域や一般社会、かつ連携研究機関と共有・協力していくプロセスを重視し、各連携研究機関が積み上げてきた都市研究における先端的取り組みをスケールアップしていくための連携型拠点として整備を図っていきます。これらの取り組みを通じ、世界及びアジアの都市をフィールドに据え、文化創造と社会包摂に資する先端的都市論を構築する共同研究と研究拠点の形成を行う中で、

「21 世紀型のレジリアント（復元力に富んだ）都市」のあるべき理念モデルと実践モデルを彫琢していくことが期待されています。



2021 年度公募型共同研究採択課題

代表者	研究テーマ
ヨハネス　キーナー （埼玉大学）	フォーマルとインフォーマルの力学から都市コモンズを問い直すー ヨーロッパと東アジアの生活困窮者支援の現場から
網中 孝幸 （包摂都市ネットワーク・ジャパン）	東アジアインクルーシブ都市ネットワークの構築に向けた都市間の経験交流
住吉 輝彌 （社会福祉法人あさか会）	地域共同のまちづくりによる社会的不利地域の再生に向けたアクションリサーチ
荒木 一視 （立命館大学）	紀伊半島における開発、災害の地域誌と地域の福利増進のための実践的研究
コルナトウスキ・ヒェラルド （九州大学）	外国人労働者の自立生活を支える社会的連帯ネットワーク― コミュニティハブ概念を中心に
西田 正宏 （大阪府立大学）	上方・大阪都市文化の研究拠点形成―大学アーカイブの整備と発信

■著者紹介（執筆順）

西田 正宏（大阪府立大学高等教育推進機構 教授／副学長）

佐藤 敦子（大阪市立大学　科研・研究補佐）

佐賀 朝（大阪市立大学大学院文学研究科 教授）

奥野 久美子（大阪市立大学大学院文学研究科 准教授）

橋本 唯子（和歌山大学クロスカル教育機構 教養・協働教育部門 准教授／
図書館副館長）

高橋 圭一（大阪大谷大学文学部 教授）

旭堂 南海（上方講談師）

URP 先端的都市研究シリーズ 34
上方・大阪都市文化の研究拠点形成
―大学アーカイブの整備と発信

2022 年 3 月 15 日　初版第 1 刷発行
編　者　西田 正宏・奥野 久美子
発行者　大阪市立大学都市研究プラザ
〒558-8585
大阪市住吉区杉本 3-3-138
電話 06(6605)2071　FAX 06(6605)2069

ISBN　978-4-904010-49-5
©2022　Masahiro Nishida & Kumiko Okuno
Printed in Japan